

「那」文化圏論

著者 覃乃昌 (Qin nai`chang)

翻訳 項青^{注1}

本文概要

中国華南及び東南アジア地域には、地名の頭に「那」（壮語では「水田」の意）の付く地名が広く分布している。そこは独特の文化現象を形成しているため、「那」文化と称している。本論はその「那」地名の範囲を『「那」文化圏』として論を進める。この「那」文化圏の中で生活しているのは、壮侗語^{注2}を使う人々である。すなわち中国の壮（Zhuang）族、布依（Bouyei）族、傣（Dai）族、侗（Dong）族、水（Sui）族、仫佬（Mulam）族、毛南（Maonan）族、黎（Li）族、タイの泰（タイ）族、ラオスの老（ラオ）族、ベトナムの岱（タイ）族、儂（ノン）族、ミャンマーの撣（シャン）族などのインド・アッサム族を含んでいる。彼らの主な文化的な特徴は、次のようである。

それらの民族の言語は、同源の語系である。その上さらに共通の文化的特徴として稲作中心の生活を送り、また稲作文化の上に形成された「那」の伝統的な生活様式、双肩石器^{注3}の使用、銅鼓^{注4}の製造と使用がある。

本論は「那」文化圏の人々、いわゆる「那文化圏種族群」と漢文化、インド文化との関連についても論じる。「那」文化圏に対する研究によって、中華民族の多元化的な意義を再認識する。

キーワード：「那」文化圏・種族群・文化的特徴・関連する文化

著者：覃乃昌 広西壮族自治区民族研究所所長 研究員 南寧

一、「那」をもつ地名と「那」文化圏

「那」あるいは「納」(古代壮字^{注5}は「𠂔」)は、壮、傣、布依などの民族の言語では「水田」を意味する。壮、傣、布依などの民族地域においては、多くの地名の頭に「那」「納」の字がつく。その使い方の特徴としては、さまざまな種類の田の俗称として使われている。また同じ意味をもつ名詞や特有な専門用語として採用されている。つまり頭に「那」、「納」の文字がついているのが特徴である。例えば那坡、那馬、那板、那龍などである。(以下論文の中では頭に「那」「納」の字をつける場合も、「那」に統一して使うこととする)

1982年、広西壮族自治区全域で地名調査を始めた。全自治区の中にはあわせて23万あまりの地名があり、そのうち少数民族語の地名が約7万あまりであった。詳しく見ていくとそれらの主要な地名のほとんどが壮語の地名であった。

1988年、張声震^{注6}が編集した『広西壮語地名選集』には、壮語の地名は5500カ所収録されている。広西壮語地名は全体の8%である。その中には「那」「納」を含む地名が872カ所あり、壮語地名の総数の15.8%を占めている。今日、私たちがアジア地図を開いてみると、珠江流域^{注7}に頭に多くの「那」「納」の字がついた地名が分布していることがわかる。中でも特に広西壮族自治区の西の方にある左江^{注8}、右江^{注9}と邕江^{注10}流域に最も密集している。

「那」の地名は雲南省にもある。その中の文山壮族苗(Miao)族自治州には518カ所あまりある【原注11】。さらに地図で見ればベトナム、ラオス、タイ、ミャンマー等にもあることがわかる。

「那」がつく地名は、近代に入ると国内外の学者に注目されるようになった。半世紀前に中国の著名な民族学者の徐松石^{注11}は『泰族僮族粵族考』の中で、次のように述べている。

広東省の台山には「那扶墟」あり、中山は「那州村」あり、番禺に「都那」あり、新会に「那伏」あり、清遠に「那落村」あり、高要に「那落墟」あり、恩平に「那吉墟」あり、開平に「那波朗」あり、陽江に「那兵」あり、合浦

に「那浪」あり、瓊山に「那環」あり、防城に「那良」あり、広西壮族自治区の柳江に「那六」あり、来賓に「那研」あり、武鳴に「那白」あり、賓陽に「那村」あり、百色に「那崇」あり、邕寧に「那関」あり、昭平に「那更」あり、平南に「那歴」あり、天保に「那吞」あり、鎮辺に「那坡」あり。この「那」の字のつく地名は、両広（広東・広西）地域^{注12}では数え切れないほど多くある。

また彼は、「那」の地名と中南半島^{注13}諸民族に関係があることに注目した。タイの歴史書の記録によれば、小タイ族人^{注14}の一部分は雲南省の国境にある十二「版纳」（「版」は壮族語で「村」の意、「那」は「田」の意味である。「版纳」の意は田のある村）からタイの北部に入り、藍那省を創立した。さらにしばらくすると「藍那朝廷」^{注15}を造った（「藍」は「屋」、「那」は「田」の意）。「藍那」は「田のある家」の意味である。「田のある家」と「田のある村」の二つの地名は、見事に一貫性を持つ。当時の小タイ族人は、かなり高いレベルの稲作文化を持っていたことが想像できる。

現在のタイでも「那」のつく地名は、数多くある。特に小タイ族人がタイに入ったルートの周辺には、「那」という文字が多く目につく。例えば「那利Na-li」、「那坡Na-poue」「那当Na-then」「那地Na-di」「那何Na-ho」「那沈Na-sane」などである。これらの地名は、広西と広東両地域との関連性が考えられる。タイ語の語順は中国語と逆のため、「那何」はすなわち「何田」となり、「那坡」は「坡田」となる【原注2】。

また現代の学者・游汝傑は、「那」の地名の分布の調査を行った後に以下のよう結論をまとめた。

「那」地名の分布地域は全部繋がっている。その範囲は、北は雲南省宣威の「那楽冲」北緯26度あたりから、南はラオスのサワンナケート県「那魯」^{注16}、北緯16度あたり。東は広東省珠海市「那洲」、東経113.5度あたり。

西はミャンマーとの境、シャン邦の「那龍」^{注17}、東経97.5度である。これらの地名の90%以上は、北緯21度ないし24度に集中している。しかも大部分は河谷と平地に位置している。広西壮族自治区だけを見てみると、70%以上は右江と左江流域に集中している。これらの地域の土壌、雨量、気温、日照などすべて稲作に適している。^{【原注3】}

筆者(覃乃昌)は1997年に出版した『壮族稲作農業史』の中で、これらの現象について論じ、これを〈独特な「那」文化〉と名付けた^{【原注4】}。それで今日、我々は「那」地名分布地域を〈「那」文化圏〉と称することになった。現時点で、手元にある資料を見れば、この地域はおよそ東は中国広東省の中部より東部にあたり、また湖南省の南部、西はミャンマーの南部とインド西部のアッサム、北は雲南省の中部、貴州省の南部、さらにその南はタイの南部、ベトナムの中部及び中国の海南省などである。

地名というのは、人類の社会生活の中で、地理的な実体、居住集落、地域の行政区画などから名付けられたもので、一種の特定された言語記号であると同時に、人類活動の歴史的な痕跡でもある。鮮明な地域性と民族性を持ち、それと同時に粘り強い持続性と安定感を持っている。「那」は壮泰語系^{注18}において、稲作の水田の通用名となる。「那～」あるいは「納～」の地名は、事実上、壮泰語系において水田の表音記号を示す文字である。筆者は「那」の起源は、最初に水田で栽培された糯米のことであると考える。「糯」という文字(古くは「粳」とする)は、壮泰語系の中で「奴(nu)」あるいは「那(na)」という。この地域の人々は長い農業生産の歴史の中で、次第に広く糯米の稲を栽培する田を「那(na)」と「奴(nu)」と呼び、また「那(na)」とは相互に関連し、対応する同源語となった。さらに「那」は漢語の「糯(粳)」の基礎となる言葉である。以上の理由から推測すれば、「那」の字を持つ地名は、地域性をもち、地名文化の景観であり、極めて豊富な、かつ奥深い歴史文化を内包している。ある程度民族の文化史を維持保存し、中でも特に稲作農業の本来の姿を反映してきた。稲作農業起源のあざ

やかな痕跡でもある。それゆえ「那」文化はすなわち稲作文化と考えられる。

二、「那」文化圏の中で暮らす民族

特定の文化は、特定の民族によって作り出され、またそれらの民族の担い手として、民族の言語情報を伝達していく。そもそも民族の情報を伝達する音声言語を持たない民族は存在しない。そうなると「那」文化圏の中で「那」文化を作り出すのは、いったいどのような民族であるか。筆者は壮侗語を話す民族であると考えている。壮侗語族とは、中国の壮 (Zhuang) 族、布依 (Bouyei) 族、傣 (Dai) 族、侗 (Dong) 族、水 (Sui) 族、仫佬 (Mulam) 族、毛南 (Maonan) 族、黎 (Li) 族等、ベトナムの儂 (ノン) 族、岱 (タイ) 族、ラオスの老龍 (ラオロン) 族、タイの泰 (タイ) 族、ミャンマーの掸 (シャン) 族とインドのアッサム族などを包括している。

この地域の民族の実体に関して、徐松石は『泰族僮族粵族考』の中で次のように論じている。

およそ泰 (tai) 語僮 (zhuang) 語と黎僂 (lipo)^{注19} 語等の言語を使う集団は、広義で壮泰人^{注20} と称することが出来る。壮泰人はタイの本国の中で暮らしている小泰 (タイ) 族と佬 (ラオ) 族、ミャンマーのシャン人、中南半島の普沙 (posa)^{注21} と普泰 (potai)^{注22}、雲南省境内に暮らす僂夷 (poyi)^{注23}、蒲人 (poren)^{注24}、大伯夷 (dapoyi)^{注25} と土僚 (tuliao)^{注26}、貴州省の侗 (dong) 人と仲家人 (zhongjiaren)^{注27}、広西壮族自治区内の僮人 (zhuangren)^{注28} と仲人 (zhongren)^{注29}、ならびに広東省の黎 (li) 族^{注30} も含まれている。【原注 5】

1991年からスタートした広西壮族自治区民族研究所とタイ芸術大学との学術的連携によって、国際交流合作の一環として「壮泰伝統文化比較研究」の共同研究プロジェクトが起動した。この国際共同研究を立ち上げることで、壮・泰二つの民族の伝統文化を項目ごとに細かく分類し、深く調査することができた。これ

に基づいて言語学、歴史学、考古学、古人類学、民族学、文化人類学など多学科の方法を用い、対照比較研究を行った。二つの民族の相違点を見つけ、相互の間に存在する歴史的な根源、またその関連性を明確にすることをめざしている。当時プロジェクトを担当した中国側の責任者・覃聖敏は『壮泰民族の起源問題について—壮泰伝統文化比較総論・その一』^{【原注6】}の中で、次のように述べている。

我々の総合的な研究結果によって、壮泰民族の起源と発展に対して比較的、正確且つふさわしい表現は、「同源異流」という言葉である。「源を同じくする」からこそ、壮泰民族の伝統文化には数多くの共通点を持つ。また同時にその中に「異なる流れ」があったからこそ、両民族の文化に差異が生じた。

これらを通して上述した「那」文化は、確実に客観的に存在しうる。

三、「那」文化圏の文化特徴

1. 言語同源であること

近年来、言語学界は「言語連合 (Sprachbund)」^{注31}の新理論を打ち出した。この理論は二つの言語が同源関係であるか、あるいは接触関係か、区別するための新しい方法である。この新しい理論と方法は、現在広範囲に認められ、受け入れられるようになった。この理論は1952年スワデシュ (M・Swadesh)^{注32}によって提唱された方法で、インド・ヨーロッパ語の中から公認された最も安定した200個の基礎語彙を選び、さらにそれを二つの段階に分ける方法である。第一段階は人類の言語の中で最も安定した核心的な基礎語彙で、「第一の百語彙」とも称する。第二段階は残りの100の語彙である。そのうち二つの言語に基づいて、第一段階と第二段階の中に関連性を持つ語彙がどれくらいあるかによって、第一段階から第二段階へ上昇か、降下かを確定することができる。そしてもし上昇とすれば、この二種類の言語は同源関係ではなく、接触関係のみである。もし降下ならば、この二種類の言語は同源関係を示す。この方法を用いて上に述べた壮泰 (チ

ワン・タイ) 伝統文化比較研究の項目を使って、壮語と泰語の比較研究を行った。その結果は次のとおりである。

第一段階は79語の関連語彙、第二段階は56語、第一段階から第二段階への変化は降下する傾向があったため、壮泰(チワン・タイ)語は同源関係であることが明らかである^{【原注7】}。その他に我々は2000あまりの基礎語彙を用いて、壮泰(チワン・タイ)語を比較してみたが、その中で発音が同じものや近いものは約75%を占めている。一部の研究者がこの結果は二つの民族が相互に交流していたと考える。しかし二つの民族の居住している場所の地理的環境をよく知っている人は、彼らは互いに距離が遠く離れていて、陸上でも水上でも交流ができる可能性が薄いことを知っている。川もなく多くの山で隔てられているからである。海の道を考えた場合、マラッカ海峡を渡らなければならない。たとえこの二つの民族が古くから交流があったとしても、このように言語の多くの共通性を持つことは不可能である。「しかしながら発生学の角度から考えると、壮族・泰族はもともと同じところで共同生活していたはずである。そうでなければそれほど多くの共通の言語を持つわけがない」と覃聖敏は指摘する^{【原注8】}。壮族と東南アジアの諸国の中の老(ラオ)族、掸(シャン)族、儂(ノン)族、岱(タイ)族などの少数民族の言語とも同じで、すべて同源関係にある。

2. 「那(稲作)」を基盤にした伝統生活様式

互いに異なる自然地理環境で暮らす人々は、それぞれがそこに適応した生活様式を選ぶ事になる。それには漁撈型、牧畜型、農耕型、半農半漁型などがある。そのうち農耕型はさらに畑稲作型と水田稲作型に分けることができる。そしてこのタイプのどちらを選ぶかによって民族の性格や文化の違いが生まれる。

「那」文化圏は北回歸線両側の北緯16度から26度、東経97.5度から113.5度までのあいだに位置する。熱帯、亜熱帯に属し、土壌、雨量、気温、日照時間などすべて稲作に適している。農業科学研究所関係者の調査によると、この地域は世界の中でも、野生の稲作の分布密度が最も高い。この地域で暮らしている壮侗語族

のグループの先住民たちは、新石器時代からこの自然地理環境の中で暮らし、またその自然環境を生かし、稲作農耕方式を行っていた。その上「那（水田）」によって稲を作り、「那（水田）」によって住居を建てるという「那（稲作）」に基づいた伝統生活様式を形成した。壮族の民間伝承に「内浦眉巴、内那眉考（doi mam mi pa, doi na mi khau（水の中に魚があり、田の中には米がある）」という諺がある。この諺はまさしくこの地域の民族共同体の生活様式を反映しており、また彼らの求めている価値観と生活目標をも表している。このような生産方法と生活様式の制約の下に、この族群が持つ実際の文化、行動文化、意識文化は、すべて鮮やかな「那」文化の特徴を有している。例をあげれば稲作農耕が行われる際、それぞれの異なる季節に合わせて、さまざまな民間伝統の祭りや、「那」文化を中心とした民間信仰等が見受けられる。

3. 有肩石器文化

考古学上において有肩石斧、有肩石鏃、有肩石鏹、石鉞などを、すべて有肩石器と称する。これらの石器に共通する特徴は、石器の上の部分に肩があることである。これは生産用の道具として直接手に握るものから、取手を付けて進化させたしるしである。この道具の出現と農業生産の発展とは、密接な関係がある。考古学の資料によると、これら有肩石器は、中国南方の広西、広東、雲南、貴州などに最も多く発見されている。しかも年代も最も早い。統計によれば現在、広西の南寧、柳州、龍州、大新、來賓、鹿寨、鍾山、賀州、百色、靖西など48の都市と郡部に合計157カ所で発見されている。中でも横県西津貝塚遺跡で発見された有肩石器は、104個と最も多い。広西で最も古い有肩石器が発見されたのは、南寧地区の貝塚遺跡である。その年代は、およそ紀元前9235～7450の間のもので、新石器時代早期のものに属する。広東で発見された有肩石器は、西樵山遺跡のものが最も早い。およそ約紀元前6000年前のもので、新石器時代中期のものである。雲南、貴州で発見された有肩石器は、広西広東型に属し、年代はほぼ新石器時代後期に属している。一部分は青銅器時代の遺物である【原注⁹】。

ベトナムで出土した有肩石器は、一般的には幅が広い形をしている。しかも厚く、重みがある。また石器の幅が広いだけでなく、製作も巧みである。肩の角度は直角になることが多いが、鋭角のものもある。ラオス、カンボジア、ミャンマー、タイで出土した有肩石器は、ベトナムと同じ傾向が見られ、すべて広西広東型の系列に属する。おもしろいことにヒマラヤ山脈の南側のインドとバングラデシュにもこの有肩石器が発見されたことである。主な出土場所は、インドのアッサムとベンガル湾の西沿岸地域である。そこで発見された有肩石器は、あるものは形式上双肩の角がはっきりして、肩の角度が直角になっている。またあるものは双肩の角がはっきりしておらず、肩の角度が鈍角であったり、鋭角であったりしている。しかし基本的には広西広東の類型に属している【原注10】。

我が国の考古学者夏鼎^{注33}は、次のように指摘している。

この有肩石器は、華南地域から東南アジアの沿岸地域を経て、インドのアッサムとバングラデシュに伝わった。時代は紀元前200年であろう【原注11】。

夏鼎のこのような指摘は信憑性があるが、年代の確定はおそらくもう少し後であろう。同じく考古学者の蘇秉琪も同じ指摘をしている。

中国の中で、西南地域とインド亜大陸の関係は、嶺南と雲貴高原の有肩石器（斧、鏟も）をモデルとする。有肩石器はインダス川に達し、そこを境界線にしてインド・ヨーロッパ語系の文化の諸要素が連結することとなる【原注12】。

この他にラオスで発見された双肩石器は、独特な形をしている。しかしこれは広西壮族地域でも同じような母型となるものが見つかっている。このように先史時代の有肩石器の分布地域と現代壮侗語族の民族居住地域の分布地域と照らし合わせると、かなりの一致がみられる。現代壮侗族語の民族の居住地をみると、全部広東広西型の有肩石器の遺跡が残されている。たとえ西越文化^{注34}の中心地を

遠く離れたインド・アッサム地域でも、数少ないが壮侗語民族の一つの傍系である阿含 (Ahom) 人が居住しているので、この地域でも有肩石器の出土があった【原注13】。以上の事例を持って、有肩石器の分布範囲は、まさしく『「那」文化圏』の範囲であり、有肩石器は「那」文化圏を代表する重要な文化特徴の一つである。

4. 大石鏟文化

有肩石器文化の中でもっとも典型的なものは、大石鏟である。我々はこれを大石鏟文化^{注35}と呼んでいる。それは「那」文化圏の中の重要な文化特徴の一つである。

19世紀60年代から70年代にかけて、考古学者が広西壮族自治区南部の60カ所あまりに新石器時代の遺跡を見つけた。これらの遺跡の中から、300個以上の石鏟が出土した。考古学では稲作農業の主な道具であるこれらを大石鏟と呼んでいる。科学測定によれば、その年代は今からおよそ5000～6000年前のものである。学界の一般的な認識として、大石鏟は双肩石器から発展、変化したものと考えられている。それらの発明と使用は、当時のこの地域の稲作農業がある程度発達していたことを表わしている。これまでの考古学の発見からみれば、大石鏟文化の遺跡の分布は、おおよそ広東西部、広西南部、海南島及びベトナム北部に位置する。中では最も密度が高いのは、広西南部、特に左右江のデルタ地域である。

5. 銅鼓文化

近代の著名な民族学者羅香林^{注36}は、次のように指摘している。

古代越族の文化で最も注目されるのは、銅鼓の製作と使用である。しかも越で製作された銅鼓の中で、有名なのは駱越^{注37}のものである。故にこれらを駱越銅鼓と呼ぶ【原注14】。

出土した銅鼓の分布は、東は広東の北江^{注38}より西の地区、西はミャンマー、

北は四川省の大渡河^{注39}の上流地域、南はインドネシアのスラバヤ島である。驚くべきことに銅鼓の分布は「那」の地名の分布とほぼ重なっている。さらに驚くのは、先史時代の有肩石器文化の分布の地域と、青銅器時代の銅鼓文化の分布とも重なるということである。

銅鼓は稲作農業に伴って生まれた一種の芸術である。銅鼓の表面には、最も普遍的な、しかも広い地域において蛙が彫刻されている。蛙は銅鼓のシンボルであり、多くの民族は銅鼓を「蛙鼓」と呼ぶ。蛙と稲作は密接な関係を持っている。羅香林は次のように指摘している。

いわゆる銅鼓の製作は、雨乞いと関係している。それについては客観的な根拠がある。銅鼓の表面に彫刻された立体の蛙、ガマ蛙を見ると、ほとんどが雨乞いにちなんで作られている【原注15】。

壮族の民間では銅鼓を収納するとき、藁を使って縄を綯い、銅鼓の耳を括る。また銅鼓をさかさまにして、中に稲の粉末をたくさん入れる風習がある。それを「養鼓」という。養鼓をする行為によって、銅鼓が飛んでいくことを防ぐという。これらはすべて銅鼓と蛙の関係や、及び稲作農業との密接な関係を示している。銅鼓文化は稲作農業から生まれ、「那」文化の重要な表現記号である。

6. 崖壁画文化

崖壁画文化は「花山文化」^{注40}とも称される。長さ200kmあまりの広西左江流域に178カ所の崖壁画がある。その絵画の造形は古めかしく、飾り気がないもので、風格はおおらかでこせこせしていない、とても豪快である。その規模の大きさと圧倒的な勢いは、まさしく世界の奇観の一つと言える。その中で特に左江支流の寧明江^{注41}の畔にある「邕（ba）莱」が、もっとも立派なものである。（壮語で「邕」は山の意で、「莱」は花の模様の意。「邕（ba）莱」は花の模様や図像が描かれている山の意で、中国語では「花山」と訳す）。一番目立つのは高さ44m、幅135m、

面積約500㎡の川沿いの絶壁に、130種の絵柄が書かれていることである。中でも人の姿と物の描写の多さ、場面の大きさは、世界の原始壁画の中でも類を見ないものである。一部の学者は、左江流域の崖壁画に描かれた切り絵のように蛙が立って踊る姿は、壮族の先住民の蛙の信仰の再現であろうと指摘している【原注16】。壮族の世界観として、蛙と稲作農業は密接な関係を持っている。これは左江流域の崖壁画も、稲作農業から生まれた文化形式の一種であることを示している。

7. 地名文化

前述した「那」がつく地名以外に、「那」文化圏において同じように密度の濃い分布をしている「板」(同音字と類似字の「版」「曼」なども含む)がある。「板」(「版」「曼」)は壮泰語では村・集落の意味を持つ。板、曼、版が頭につく地名は、「那」が頭につく地名と同じく、壮泰語民族が居住する地域のあちこちにみられる。『広西壮語地名選集』を見ると広西で板のつく地名は、400あまりある。その分布地域は「那」とほぼ一致している。例えば雲南省の西双版纳の名は、「西双」は壮傣語^{注42}で「十二」の意で、「版」は「村」、「納」は「田」なので、「十二村の田」の意味である。壮泰語の中で「那」と「板」の関係は密接であり、よく田植えの人を「布板」、「布那」という。その中に「板那」は田の横に建つ村落の意味である。これは独特な文化現象であり、明らかに「那」(稲作)文化の特徴を有している。

四、「那」文化圏族群及びその文化の独立した起源

いままで述べてきたように「那」文化圏の族群は、壮侗(チワン・トン)語族の言語を操る民族に属する。かれらは共同の文化特徴を持ち、その先住民は歴史上「百越」^{注43}という民族の中の西甌^{注44}・骆越と呼ばれたものである。東南沿海に住む越族(東越^{注45}と略称す)と対応して、西越と呼ぶ。かつて史学界にも西越は東越から移動してきたものだという認識があった。とくに秦の始皇帝の時代および漢代の統一後、長江の中流、下流地域の百越族群は次々と南へ移住したと。それによって東越の文化がもたらされ、嶺南文化^{注46}は東越文化の伝播の結果で

あるという。それ対して筆者は次のように考える。

壮侗（チワン・トン）語族民族の先住民である西甌・駱越は、東南沿海の越族の文化特徴と似ている部分はあるが、それは似た自然環境のもとにあるので、人類のある種の原始文化の類似性であり、それによって西越が東越から生まれてきたということは証明することができない。上に述べた西越地域のいくつかの文化の特徴は、東越地域ではほとんど見られないので、これは明らかな証拠となる。それによってこれらの原始的に自然発生した文化は、東越地域から伝播してきた可能性がないことを意味している。同じく西越地域のこれらの文化は、中原文化の伝播でもない。これは一種の独立起源の文化形式である。

まず体質人類学からみれば、嶺南の古人類の体質と現代嶺南人の体質の特徴は似通っている。20世紀80年代、ある学者は広西現代壮族の体質と柳江人^{注47}、甌皮岩人^{注48}、曇石山人、河宕人と比較した。甌皮岩人と現代壮族との比較の結果は、両者とも最小前頭幅（Minimum frontal diameter）が狭く、垂直頭蓋指数（Vertical cranial index）、顔面角（Face angle）、眼窩指数（Orbital index）、鼻指数（Nasal index）などにおいて、とても近いことがわかった。両者とも平均的な中眼窩型（Middle cranial type）、鼻幅広いタイプで、これは現代壮族が、甌皮岩人の血筋を受け継いでいる可能性があることを意味している。壮族は頭部の長さ、高さの指数（length-height index of head）、また頭部の幅高指数（breadth-height index of head）、顴骨の広さ、上顔高、鼻根指数（Nasal root index）等の項目においてもさらに甌皮岩人より時代的に遅い河宕人に近い。これらの相関関係は非常に深い意味がある。上顔幅の広いタイプの上顔高指数、鼻幅広いタイプの鼻指数、低くなる鼻根指数と顎突出タイプ（Protuberant jaw type）の齒槽顔面角等においても、甌皮岩人より先に遡れば、若干にネグロイド人種（Equatorial race）^{注49}に近いという傾向がみられる。それらはちょうど旧石器時代の晩期柳江人にも近い関係があるともいえる。このような継承された血縁関係は、広西で生活していた新石器時代の原住民はその地で生まれその地で育つ混じりけのないものであろう【原注17】。

その他に李富強と朱芳武は、柳江人などの古人類の骨格と現代壮族の生きた人々のデータ分析を行った結果、次のように述べている。

現代壮族はその体質の形成過程において、嶺南地域と東南アジアで暮らしていた新石器時代の人類と一定の系統関係をもつ。その根源はおそらく旧石器時代晩期の柳江人に遡ることができる^{【原注18】}。

次に考古学の発掘からみてみよう。「那」文化圏の中には、雲南省元謀県で発掘された約150万年前の「元謀人」があり、広西の右江盆地では約73万年前の古人類の生活遺跡が発見された。また広東省の曲江県では、今から約10万年前の「馬壩人」が発見されている。広西柳江県では今から約5万年前の「柳江人」が発見された。来賓県では、今から約3万年前の「麒麟山人」^{注50}が発見され、また同広西自治区で「靈山人」と「隆林人」等も発見された。考古学上の発見によると、数多くの旧石器時代晩期の古人類遺跡の周辺に、密度の高い発達した新石器時代の文化遺跡があった。これらは互いに繋がりがあり、前後の因果関係のある系統性を持っていることを意味する。

例えば、「馬壩人」遺跡の周辺には相当密集的な新石器時代の文化遺跡があった。さらにその後、この地は嶺南戦国時代の古墳群の分布の中心地であることが判明した。それらによって、切っても切れない継続性及び関連性をもつことがわかった。また今から5万年前の柳江人の遺跡のまわりに、3万年前の来賓県の「麒麟山人」、および旧石器時代の柳州市の「都楽人」遺跡、「九頭山人」遺跡、「白蓮洞人」遺跡、柳江県「甘前人」遺跡、忻城県「牛岩人」遺跡、また新石器時代の柳州市「鯉魚嘴山人」^{注51}等の遺跡などがある。新石器時代の文化遺跡からみれば、これもこの地で人類が引き続いて生活していることを証明している。

早いものは今から1万年前後の桂林甑皮洞穴岩遺などの貝塚遺跡がある。新しいものとして4000年～6000年前の大石鏟文化遺跡がある。その中で石山地域に分布する洞穴遺跡は、早いものは1万年前、遅いものは3000年前のものがある。

これらはすべて太古時代の人類が移動もせず、絶滅もしないで子々孫々そこで暮らしていたと考えられる。彼らは「那」文化圏の中の原始住民である。これらの遺跡が含んでいる文化的なものは、農耕稲作、貝類をよく食し、干欄^{注52}式の家に住み、屈葬^{注53}、拔牙^{注54}、有肩石斧と石鏟を使用するなどの特徴を持っている。これは明らかに「那」文化圏の特徴と密接な関係を持っている。そのうち特に屈葬は、広西にある新石器時代の文化遺跡の中だけでも200例以上ある。その屈葬は、現在でも「那」文化圏族群の中に普遍的に存在する。

第三にここで言語分野においての説明をしたい。「那」文化圏族群の言語は同源関係であることについては、前の第「三」部に論じてきたが、ここではさらに説明を行う。長期に亘って我々は、「那」文化圏族群の言語が漢語と同源関係にあると認識していた。しかし最近の新しい研究の結果によれば、それらはただの接触関係にあるということが分かってきた。近年、言語学者たちは「言語関係語族樹形図」^{注55}を使って、漢語と壮侗（チワン・トン）語の比較をした。その結果は二つの言語の関係は、語彙の数が第一段階^{レベル}から第二段階^{レベル}に行けば行くほど上昇する関係にあった。これは壮侗（チワン・トン）語と漢語の間が、単なる接触関係のみで、同源ではないということを意味している【原注19】。

事実もその通りである。壮族の例を挙げてみよう。地理的条件からみれば、壮族の先住民の分布地域と漢民族の分布地域の交通は、前述した秦族と比べるとかなり便利である。また交流の歴史をみると、仮に秦の時代から始まったとして、壮族の先住民と漢民族の交流は2000年の間絶えることがなかった。それにもかかわらず今日になっても、壮族語と漢族の言葉は依然として差が大きく、お互いに直接会話することが困難である【原注20】。潘其旭は、壮語・漢語の語順構造の仕組みに対して比較対照を研究し、壮侗（チワン・トン）語の言語体系と漢語の言語体系は、言語発生学において同源関係ではなく、接触関係であることを証明した。彼は次のように指摘している。

壮語の文の構造類型と人間の思考の順序は、同じである。つまり人間の

感知した言語の順序と思考の順序がほぼ同じで、A + Bの思考パターンとなる。漢語の構造類型は逆に人間の感知と思考の順序が異なり、必ず前に加工する過程を経て、ようやく規則性のある表現に達することになる。いわゆるB + Aの思考パターンとする。それで壮語の文の形成は、類推化(analogy)的な造語法であり、全体性的な思考に向かって進む。漢語は情態化的造語方式で、意象的な思惟特徴を持つ。また壮語の造語音声の形式は演繹性的、かつ特有の抽象的な思考資質を有し、同音語がわりと少ない。漢語の造語音声の形式は、飛躍的な、ファジー理論的な思惟の特性を持ち、同音語が非常に多い。等の他の事例はあるが^{注56}、明らかに壮語と漢語の表現的な意味と情感的な意味は、方向性がまったく異なっていて、いわゆる南轅北轍^{なんえんほくてつ}とも言えるだろう。まさしく相互に「順序があべこべだ」になってしまう。それゆえ「那」文化圏の言語＝壮侗(チワン・トン)語族語は、一種の独立起源の言語体系であり、漢語とは単なる接触関係にあり、同源関係にはないことが示唆される^{【原注21】}。

五、「那」文化圏と漢文化及びインド文化との関係

我々は「那」文化圏族群とその文化は、独立した起源であると言っている。しかしそれは孤立して発展したものではない。「那」文化圏の東部は、漢文化から強い影響を受けていた。そして西部はインド文化の影響を受けた。

中原地域と華南、東南アジアの交流の歴史は、神話伝説の中の堯舜の時代まで遡ることができる。『墨子・節用』では「古の者堯は天下を治め、南は交趾を撫する」とあり^{注57}、『大戴礼記・少間篇』では「虞舜天徳を以て堯に嗣ぎ(中略)南のかた交趾を撫で」と記されている^{注58}。また『尚書・堯典』では「申ねて義叔に南交^{すまふ}を宅るを命じ」とある^{注59}。ここの交趾^{注60}と南交^{注61}は、すべて嶺南を指す。『史記・五帝本紀』には「舜南に巡狩し、蒼梧の野に崩ず、江南の九嶷に葬る、是を零陵と為す」とある^{注62}。『礼記・檀弓下』には「舜蒼梧の野に葬る」とあり^{注63}、『淮南子・人間訓』の高誘注には「九嶷は山名なり。蒼梧に在り、虞舜の

葬る所なり」とある^{注64}。考証によれば、それらの中に出てくる零陵^{注65}、蒼梧^{注66}の地名は、みな壮族先住民の蒼梧・西甌と駱越部族の居住地である。壮族地区の人々は早くから中原地域と文化の交流があった。後に殷商・周の時代になると、このような交流は一層さかんになった。

『逸周書・王会解』には「南甌、鄧、桂国、損子、産里、百濮、九菌を正し、珠璣、玳瑁、象牙、文犀、翠羽、菌鶴、短い犬を請い、献^{たて}まつる」とある^{注67}。この甌はすなわち西甌で、桂国^{注68}、嶺南地区を指す。これらははるか昔からこの地区の原住民と中原地域の殷商王朝との間に、交流があったことを示している。周王朝と嶺南地域の原住民も経済と文化的な往来があった。さらに『逸周書・王会解』には「路人大竹」、「蒼梧翡翠」といった記載も見られる^{注69}。また『呂氏春秋・孝行覽』にも「越駱之菌」の記載がある^{注70}。嶺南の特産は絶えず中原地域へ送り出されていたことが証明している。1974年広西武鳴県と興安県から、それぞれ殷商時代の銅卣（ゆう）が出土した。また興安と灌陽などの地域で、西周時代の銅鐘が発見された。その形や模様は、中原地域の青銅器ととても良く似ている。これは中原地域の文化もゆっくりと嶺南地域へ流入していったことを示している。

春秋戦国時代、楚の文化がしだいに南に入るにしたがって、嶺南と中原文化の交流はますます増え、広がりをみせた。これは広西北部地域の恭城、平楽などの考古学の発見により、証明することができる。例えば平楽の銀山嶺遺跡（西甌戦国時代の古墳）から銅製の双肩型鉞、長方形の釜首、折りたたみ式肩瓶、刃の幅広い刀、あるいはたて刀などが出土した。これらは両広地域の新石器時代に流行した双肩石斧と非常に似ている。武鳴県元龍坡にある駱越・西周・春秋戦国時代の古墳は、みな小型の土穴古墳である。埋蔵品は陶器を中心としているが、銅と玉石器もある。銅製品の中には卣・盤がある。それらは中原地域の西周時代の同類とよく似ている。しかし刀、鉞、匕首（あいくち）、鎌（やじり）などの形は、独特なもので嶺南地方の色合いが豊かである。秦漢以降、多くの中原の漢民族は嶺南に移住し、嶺南と中原地域の文化交流はさらなる新しい歴史時代を迎えるようになった。

「那」文化圏の東部で漢文化の影響が大きいのは、まず壮 (Zhuang)、布依 (Bouyei)、侗 (Dong)、水 (Sui)、仫佬 (Mulam)、毛南 (Maonan) などの民族である。ただ壮族の例を挙げると、壮族と漢族の融和でもっとも突出しているのは言語である。壮語の中に大量の借用語として漢語が入り込んでいる。例えば中古時期に取り入れた pwn6 (糞)、pan1 (分)、pi2 あるいは pei2 (肥) 等の単語の発音は、壮語の中に中古漢語の「古無輕唇音」^{注71}の音声の特性が残っている。早期のこのような借用語は主に日常生活用語が多い。それは生活用品の「碗 (わん)」「筷子 (はし)」「桌 (つくえ)」「椅 (いす)」、重さの単位「斤 (きん)」「兩 (りょう)」や長さの単位「尺 (しゃく)」「寸 (すん)」などである。それらは上の「pwn6 (糞)」のように壮語の発音記号・ローマ字つづり^{注72}で表記する必要がある。ある人の大まかな統計によると、このような借用語は壮語の単語の中に、およそ10%を占めている。例えば農民に大豆を植える全過程を述べてもらうことにした場合、借用語の比率は壮語の単語の中に、およそ10%を占めている (重複するものも含む)。さらに現代政治などの内容になれば、漢語からの借用語の使用は50%前後になる^{【原注22】}。壮族の人が漢語を使う頻度も、社会の発展によって増加している。戴慶厦は『社会言語学教程』の中で、次のような実例をあげている。南寧市、南寧市の近辺に住む壮族は、壮語を使う以外に漢民族の標準語、粵語^{注73}、西南官話^{注74}などをも使う。さらに一部の人はいくつかの漢民族の方言を操ることができる。

文字についてであるが、唐代以来、壮族の民間ではある種の土俗文字^{注75}が流行し始めた。壮語ではこれを「Sawndip」や「Sawdauh」と呼んでいた。意味は「生僻字 (なじみのない字)」、「道公字」^{注76}で、これは主に漢字の「六書」の構造方法を一部真似して作り出したものである。大部分は漢字の楷書の偏旁、部首等から作りだされていた。その中では自分で勝手に作ったものも少なくない。構造の仕組みによれば、形声字に分類されるものは伝 (vun・人) があり、会意字の例としては、𠂔 (kwn2 上)、𠂔 (mi 有)、漢字の借用字は、心 (sim1 心)、勝手な造字は、𠂔 (ku6 倣) などがある。このような古壮字

は壮族の民間で最も早く見られるものは、唐代永淳元年（682年）、壮族人の澄州刺史（現在の上林県境内。刺史は地方長官）韋敬というものが建てられた「澄州無虞県六合堅固大宅頌」という石碑である。その碑文には「𪛗、𪛗、𪛗、𪛗、𪛗」などの古壮字がある。この石碑は今でもなお広西壮族自治区上林県麒麟山にきれいに保存されている。范成大の『桂海虞衡志』^{注77}、庄綽の『鷄肋篇』^{注78}、周去非の『嶺外代答』^{注79}には、古壮字およびその使用状況について記されている。『桂海虞衡志』の中に広西一帯は「辺遠俗陋、牒訴券約、專用土俗書、桂林諸邑皆然」と記す^{注80}。当時、古壮字が普遍的に使われていたことがわかる。1988年出版された張声震主編の『古壮字字典』には、壮族地域で使われている古壮字が10700字も収録されている。そのうちよく使われ構造的に合理性のあるものは正体字として認められ、4918文字がある。このような古壮字は、大量に民間の契約書類、石碑碑文、師公經^{注81}の詩唱本、民謡の抄録、神話伝説などに使われている。また壮族の著名な長詩『布洛陀』、『莫一大王』、『布伯』、『伝揚歌』など、及び漢族の伝説・故事の題材で作られた長い詩『何文秀』、『二度梅』、『梁山伯と祝英台』等の芝居用唱本は、すべて古壮字で記録、保存されている。

次に文化教育方面について述べる。秦の始皇帝は嶺南を統一した後、郡と県を設置した。その後、秦が滅亡すると趙佗は嶺南を治めようと、中原の冠と帯を捨て、服や風俗習慣も変えた。「百越を和輯する」といった民族政策を実行した。そして漢・越同士の通婚を提唱し、その上「詩礼を以て其の民を感化す」^{【原注23】}とも主張した。漢の武帝が南越国を平定した後、「其の故俗をもって治める」という政策を取入れながら、進んで中原の先進的な文化を嶺南地域に紹介した。さらに嶺南に学校を設立した。隋、唐以後は、嶺南で科举制度も推進した。また宋、元から明、清時代まで、広西各地に書院を発展させ、中華民国以後は、近代学校を建てた。いずれの政策もすべては中原漢民族文化が壮族地域に浸透するように広げたためである。壮と漢の文化交流と融合を推し進めるものであった。

宗教について説明する。近代以後、道教、仏教が大規模に壮族地域に入った。しかしこの二つは、どちらも壮族の宗教にはならなかった。逆に意識的にそれら

の中から壮族に合う内容と形式を取捨選択し、利用した。そしてそれは壮族の民間宗教の中に取り入れられ、師公教^{注82}を形成した。現在壮族の師公教の祭事儀式の中には、道教の内容もあれば、仏教の内容もある。

「那」文化圏の西部は主に傣(Dai)、泰(Tai)、老(Lao)、掸(Shan)、阿含(Ahom)族の居住地であり、地理的位置としては辺鄙な位置にある。歴代の中原政府の官僚の目には、これらはみな「蕃貊の地(野蛮の地)」[化外之域(文明の及ばぬ地)]に過ぎず、彼らはその地域に関しては何も知らず、単に噂によってイメージを作ってきた。またそのイメージによってこの地域は少しも益となることはなく、捨てても損をすることはないと思われていた。そのうえ地理的条件も悪く、山々が聳え立ち、朝廷が何度も征伐しても、結局征伐できずにそのままとなった。特に中原政府の国力が衰微しているときは、この地域に注目する余裕もなかった。当然これらは中原と関係のない事はなかったが、興味は薄かっただけである。歴史書を見ても、記述は少ない。雲南の学者黄惠焜は次のように指摘している。

この地域の越人(すなわち後の傣、泰、掸、阿含族)は四つの方向からの文化的影響を受けている。第一に東北部からの中原文化の影響。第二に北方からの氐羌(Diqiang)文化^{注83}の影響。第三に東方からの楚文化の影響。第四に西部からのインド文化の影響を受けている。そのうち中原文化はそれなりの烙印を押した。楚の文化は雲南省中部までで、氐羌文化はタイプがあまりにも違い過ぎる。しかも目立たないため、百越文化より優勢が見られず、征服した効果もあまりなかった。ただ唯一インド文化の影響は、奇跡的に威力を発揮した。インド文化は奥深く、柔軟性があり、非常に魅力的なものだった。一度越人の民俗習慣、および民族の性格と結び合うと、相性が意外によかった。その上小乗仏教の伝播によって、まるで菩提樹のごとくすぐ根をおろし、芽を出し、しだいにますます盛んになった。インド文化は越人文化の進む方向を変え、越人の文化の内容を豊かにし、越人の文化気性が新た

に作られた。さらに越人の文字創作を後推した。この地域の越人が最終的に泰、湄などの民族を形成させることに影響を与えた。譬えて表現するならば、もし壮族が「漢民族化された越人」であるなら、泰族は「インド化した越人」であると言えよう【原注24】。

六、「那」文化圏と中華民族の多元一体文化

我々が「那」文化圏の存在を主張するのは、アジア文化の起源の多元性が、それぞれ異なる自然環境などの理由から決定されているからである。長い歴史の発展の中で、それぞれの民族はそれぞれの国の中で、同源異流の文化を形成してきた。中華民族の文化について見ても、数多くの民族の文化が合流し、一種の「多元一体」的な文化である。まさに費孝通が指摘したとおりである。彼は次のように述べている。

中華民族は積極性を持つ民族実体として、およそ100年来、中国とヨーロッパの列強との戦いの中で生まれたものである。ただし、一つの民族実体としては、何千年の歴史過程の中で形成されたものである。中華民族多元一体の形成過程において、その主流はさまざまな形で分散、かつ孤立的に存在する民族の単位である。接触・混同・連結と融和を通した上、同時に分裂と消滅が繰り返されることによってそれらが組み込まれ、相互依存・相互補完とした利害関係となっている。さらにそれぞれが個性を持つことを許し、かつ多元性を有し、一体化できるものである。

また彼は中華民族の多元一体の局面を形成する過程の特色について、以下のよう

に述べている。

はるか昔、今からおよそ3000年前、黄河流域の中流あたりにいくつかの民族集団が集まり、しだいに融合していった。その中の核的なところから、

華夏^{注84}という国家が生まれた。雪だるまが転がれば転がるほど大きくなるように、周辺民族を次々に吸収していった。後にこの集団は黄河流域と長江の中流、下流の華東平野をも支配した。そして他の民族から漢民族と呼ばれるようになった。漢民族はその後、さらに他の民族を吸収し、日に日に大きくなりながら、他の民族の居住地に侵食しはじめ、そのうちまとめ役としてのネットワークを構成した。この疆域の数多くの民族連合の形成に、不可欠の統一の基礎を固めた。次第に思うままの民族実体ができ上がり、さらに民族の自覚を経て、中華民族と呼ぶようになった^{【原注25】}。

長期にわたって我々はよく黄河流域文明を中華民族の「源」とし、黄河文明は＝中華文明であると認識していた。また中国の古代文明を論述する際に、南方より北方を重視し、北方（黄河流域）は根源であり、南方を軽んじて「その流れの一つ」とし、中華民族文化は黄河流域中下流から始まり、四方に拡散したと認識してきた。それによって研究過程の中で、黄河流域の漢民族ばかり重視され、その周辺の少数民族の文化は軽視されていた。そのため非科学的な説明を導くことになっている。

大きな河川の多くは、人類文明の揺りかごである。西アジアには二つの川があり（チグリス・ユーフラテス、インダス）、エジプトにはナイル川がある。中華民族には黄河がある。しかし我が国の領土は広く、民族も多数で、その文化の源は一つと限定するのは不可能である。事実もその通りである。黄河流域文化は、我が国の文明史上、確実に重要な役割を占めている。特に青銅器時代以後、ずっと主導的な地位を占め、周辺地域に多大な影響を与えている。しかし注意しなければならないのは、同じ時期に異なる地域の古代文明が、それぞれの特徴を持ち、それぞれの段階を経て発展を遂げているということである。一つ確かな例を挙げてみよう。黄河流域では粟を中心とする畑作農業文化が現れたとき、長江、珠江流域では稲作文化中心の農業文化が出現した。前述したように「那」文化圏は、すなわち稲作文化圏である。この文化圏は稲作農業起源の発祥地の一つである。

我々南方民族が中華民族の農業文明に対して、貢献したことについて充分注意を払われるべきである。我が国は、新石器時代から次第に北から南へと牧畜業・畑作農業・稲作農業といった三つの文化地域を形成していったが、現在の考古学の発見から見れば、南方の稲作農業の出現の時期は、北方の畑作農業より早い。費孝通は次のように指摘した。

原始時代において、各方面からやってきた人々が同じ所に居住していても、同じ起源であるということはとても考えられない。しかもはっきり言えることは、これら長期的に各地域に分散していた人々は、必ずそれぞれ異なる自然環境の中でそれぞれ各自の文化を発展させている。(中略) 考古学上においても新石器時代の豊かな出土品を通じて、中華の大地に地方の特色ある多様な文化圏があったことが証明できる。もし我々が統一民族の集団の人々に、一定の文化上の一致があると認識するならば、6000年以前の中華の大地にすでに異なる地区でそれぞれ数多くの集団が居住していたことが推定できる。新石器時代の各地の異なる文化圏は、我々中華民族の構造が多元一体であることを改めて知らしめる出発点である【原注26】。

本文の記述のように嶺南文化と中原文化、珠江流域と黄河流域は、相互に影響しあい発展してきた。中華民族の文化が中断することがなかった理由は、始終強大な生命力を持っているからである。その主な原因は、中華の各民族が互いに浸透し、融合しあうことによって形成されたからである。我々はこのような歴史唯物主義の観点を持って、中華民族の歴史と文化を研究しなければならない。それと同時に同じ歴史唯物主義的な視点で、漢民族の歴史を研究しなければならない。

【本論文の原注】

- 1、任勇『文山州壮族古籍工作的彙報』（1996年12月にまとめた『全国五省区壮族古籍整理協作會議文件彙編』の謄写版印刷による）

- 2、徐松石『泰族僮族粵族考』(『徐松石民族学研究著作五種』P317~318、広東人民出版社、1993年)
- 3、游汝傑『從言語地理学和歴史言語学試論亞洲栽培稻の起源和伝播』(『中央民族学院学報』1980年第三期)
- 4、拙論(覃乃昌)『壮族稻作農業史』(P67、広西民族出版社、1997年)
- 5、徐松石『泰族僮族粵族考』(『徐松石民族学研究著作五種』。P308~309、広東人民出版社、1993年)
- 6、《広西民族研究》1998年第三期参照
- 7、8、覃聖敏『關於壯泰民族的起源問題』(《広西民族研究》1998年第三期)
- 9、13、鄭超雄『壮族與東南亞文化淵源的考古学分析』(壮学首届国際学術研討会論文 1999年4月)
- 10、傅憲国『論有段石鏃和有肩石器』(《考古学報》1988年第一期)
- 11、夏鼎『中巴友誼の歴史』(《考古》1965年第七期)
- 12、蘇秉琪『中国文明起源新探』(P172、三聯書店、1999年6月)
- 14、15、羅香林『古代越族文化考』(『少数民族史論文選集』(三)。広西民族研究所資料組1964年編印)
- 16、潘其旭『花山崖壁画——図騰・入社儀式的芸術再現和進化』(《民族芸術》1995年第三期)
- 17、蔣廷瑜・彭書林『広西古人類の発見和研究』(李富強・朱芳武《壮族体質人類学研究》からの引用。P168、広西人民出版社、1993年)
- 18、李富強・朱芳武『壮族体質人類学研究』(広西人民出版社、1993年)
- 19、陳保亜『論言語接触與言語聯盟——漢越(侗台)語關係解釈』(語文出版社、1996年)
- 20、覃聖敏『關於壯泰民族的起源問題』(《広西民族研究》1998年第三期)
- 21、潘其旭『壮語詞序順行結構A+B型の思維模式與漢語詞序逆行結構B+A型の思維模式的比較研究』(壮学首届国際学術研討会論文 1999年4月)
- 22、周大光主編『壮族伝統文化與現代化』(P215、広西人民出版社、1998年)
- 23、『後漢書』「任延伝」
- 24、黃恵焜『從越人到泰人』(P28~29、雲南民族出版社、1992年)
- 25、26、費孝通『中華民族多元一体格局』(P1~4、中央民族学院出版社、1989年)

【訳者注釈】

注1、熊本学園大学講師。文学博士。中国広西壮族自治区出身。共同訳者及び日本語監修田畑博子。中国山東省曲阜師範大学翻訳学院日本語教師、民俗学博士。なお本文における以下の注釈は、全部訳者によるものである。

注2、壮侗（チワン・トン）語は普通「カム・タイ語派（Kam-Tai）」と呼ばれている。これに相当する中国語は「侗台語族」「黔台語族」である。しかし中国の言語学では「壮侗語族」という名称を採用している。国際的な分類においては、壮侗語派（Zhuang-Kam branch 壮侗語支）であり、漢・チベット語族（Tibeto-Chinese, Sino-Tibetan 漢藏語系）に属する。その中チワン・タイ語群（壮傣語支）・トン・スイ（侗水語支）語群・リー語群（黎語支）に分かれる。（岩佐昌暲『中国の少数民族と言語』による。光生館）

注3、双肩石器は主に双肩石斧である。新石器時代の石器で、広西壮族自治区紅水河流域に見された化石で、長さ7.1 cm、幅4.6 cm、幅5.3 cmの二つの肩がついているもので、南方稲作の文化圏に多く出土される。

注4、銅鼓は、青銅でつくった太鼓のこと。清・屈大均撰『広東新語』巻15「貨語・銅」によると、広西右江流域古壮族の居住地に銅の産地があり、地面を一尺ほど掘ればすぐ銅があると記録されている。故に蛮人は好んで銅器を作るといふ。『後漢書』巻54「馬援伝」には「馬於交趾得駱越銅鼓」の記録があり、その唐・李賢注には「裴氏広州記曰、俚獠鑄銅爲鼓。鼓雅高大爲貴、面闊丈餘。初成懸於庭、剋晨置酒招致同類。來者盈門豪富子女、以金銀爲大釵、執以叩鼓、竟留遺主人也」とある。後漢時代からすでに幅丈ほどの大きな銅鼓が作られていた。しかも金持ちの象徴として祭儀の時に使われた。また『隋書』巻31「地理志下」によると「（諸獠者）並鑄銅爲大鼓。（中略）俗好相殺、多構仇怨。欲相攻則鳴其鼓、到者如雲。有鼓者号爲都老、群情推服」とある。諸獠人は銅を鑄り、大鼓となす。お互いに怨むことで戦いが多く、攻めるとき銅鼓を鳴らすと、氏族の人々はみんな雲のように集まってくる。鼓者は〈都老〉と呼ばれる。唐代・劉恂撰『嶺表録異』巻上「銅鼓」の条には「蛮夷之樂有銅鼓。馬形如腰鼓、而一頭有面、鼓面圓二尺許。面與身連、全用銅鑄。其身遍有蟲魚花草之狀、體均勻厚二分。己來鑪鑄之妙、實爲奇巧。擊之響亮不下鳴鼙（銅鼓の表面と胴部は繋がっていて、すべて銅で鑄造されている。その体にはあまねく虫、魚、花、草があり、その造りは均一で、厚さは二分（約0.6cm）より

厚く、鑄造技術の巧みさはすぐれている)」と賞賛している。「万家壩型銅鼓」は雲南省楚雄州の万家壩古墳群で出土された銅鼓である。銅鼓の中で最も古いもの(紀元前八世紀～五世紀の春秋戦国時代に作られた)で、銅製の壁が厚く、鼓面には模様もなく、鍋に近い形をしている。その上食物を炊く際の煤が残っていたことから、初期は炊飯のための銅釜と推測される。

注5、古代壮字とは、壮族の古文字である。秦漢以後、漢民族の流入に伴い、壮族先住民は漢字を借りて、本民族の文字すなわち「古代壮字」、或いは「土俗字」「方塊壮字」と呼ばれる文字を作ることになった。唐・宋時代になり、壮族の知識人達は漢字の形、音、意味と六書構字法を利用して、正方形の壮文字を作るが、これが所謂sawleu: nɔ̌(壮族の文字)と呼ばれた「方塊壮字」である。このような土俗文字は、民間において広く使われ、民謡、故事、伝説、写経、契約、記帳などに用いられた。このあたり、宋・周去非撰『嶺外代答』巻4「風土門」俗字の条に詳しい。また、范成大撰『桂海虞衡志』「雜志」〈俗字〉には、「辺遠俗陋、牒訴券約、專用土俗書、桂林諸邑皆然」(辺鄙で野蛮、訴訟状はもっぱら土俗の文字を用いている。桂林の多くの村も、みな同じであった)と記す。しかし「この文字は民謡の創作や記録、道士(壮族民間のシャーマン・道公と呼ぶ)の写経等に用いられただけで、民族文字として広く普及することはなかった」と岩佐氏が指摘している。(岩佐昌暉『中国の少数民族と言語』(光生館)第Ⅱ章「少数民族諸言語の分布とその言語的特徴」1.3〈チワン・トン語派、1.3.1チワン・タイ語群(壮傣語支)〉)

注6、張声震(故人)は、元広西壮族自治区の副主席。壮族出身、壮・タイ語の研究者である。張氏は1985年政界から引退したのち、中国西南民族研究学会や広西壮学会の名誉会長に就任し、西南部や広西壮族自治区の少数民族文化を救うために尽力した。1999年に壮学叢書シリーズ(広西民族出版社)を着手し、壮学叢書の総責任者となった。西南部地区の少数民族の文化遺産を熱心に蒐集・整理に尽力し、研究を行った。さらに『古壮字字典』、『広西壮語地名選集』、『壮族通史』、『壮族民歌古籍集成』等、数十巻にわたる壮学叢書を出版した。その主なものは『壮・タイ民族伝統文化の比較研究』、『壮族の自然崇拜』、『壮族の銅鼓研究』、『壮族のトーテム考』、『壮・侗族の民族建築文化』、『師公・儀式・信仰——壮族民間師公教の研究』、『中国壮族薬草学』、『壮族麼經布洛陀影印訳注』、『壮族神話集成』等がある。

注7、珠江流域、珠江は河の名で、中国で三番目に大きな河川であるが、総流量では、全国二

番目である。全長2400kmで、雲南省の東境を源流とし、貴州省・広西壮族自治区・湖南省・江西省等を経て、広州から南シナ海に注ぐ。主に西江（2197km）、北江（468km）と東江（523km）の三つの川の流域、及び河口の珠江デルタから形成され、ベトナムの一部を含めて「珠江流域」と称す。南方内陸の水路網として発達している。

注8、左江、ベトナム北部と広西壮族自治区西部に流れる河の名。鬱江右側の支流である。ベトナム境内から発し、広西壮族自治区南寧市で右江と合流する。全長591kmで、流域の面積は32379平方km。中国国内の長さは342kmで、流域の面積は20786平方kmである。珠江流域鬱江水系に属する。（『中国河湖大典』「珠江卷」（中国河湖大典編纂委員会。中国水利水電出版社、2013年1月）

注9、右江、珠江水系西江支流鬱江上流にある河の名。雲南省を源流とし、広西壮族自治区の百色地区を経過し、南寧市で左江と合流してから鬱江となる。右江は左江の右にあったためその名が付いた。古くからその流域は壮族の最密集地である。史料にも「左右江」「左右江溪峒」とあり、先住民の居住地域として知られている。全長707kmで、流域の面積は38612平方kmである。その支流によって形成された右江平野は広西壮族自治区の中でも有名な農作物の産地であり、また中国最大の亜熱帯の果物の産地である。（牛汝辰『中国水系詞典』哈爾濱地図出版社、1995年1月）

注10、邕江は現在広西壮族自治区南部を貫く大きな河川。珠江水系西江支流のひとつである。全長133.8km、流域面積は6120平方kmである。その上流には左江・右江があり、区都南寧市内で合流した後は邕江となり、下流の梧州では西江となる。広州では珠江と合流し、南海に注ぐ。「邕」は『旧唐書』巻41「地理志」〈嶺南道〉に見られ、「邕管十州、在桂府西南（中略）貞觀六年（632）改爲邕州都督府」とある。（広西南寧市文聯編集部編『邕江』（邕江編集部出版、1980年第5期）

注11、徐松石（1900～1999年）、広西壮族自治区容県の客家人で、著名な教育者・神学者（牧師）・民族研究者・文字研究者及び歴史学者。1918年上海の滬江大学で社会教育を専攻。卒業後上海崇徳女子中学校の校長となり、滬江大学と華東大学等でも教える。1926年から東南アジアの民族史に関心を持ち、中国の西南地域に入り、苗・瑶・壮の村々で現地調査を行った。その後長年嶺南民族歴史文化の研究を続け、壮族を研究する先駆者として多くの中国の民族

研究に関する書物を書き上げた。1938年に書かれた『粵江流域人民史』は、中華書局で出版された後、日本語に訳された。1947年の『タイ族壮族粵族考』は、全国学術著作賞を受賞し、1957年にアメリカに移住した。その後中国語と英語で、嶺南文化の銅鼓や神話等を紹介し、壮族の文字の研究に力を注いだ。

注12、両広はまた「両粵」ともいう。現在の広東省（海南島を含む）・広西壮族自治区を合わせた呼び方である。両広の最初の由来は明・憲宗の成化元年（1465年）韓雍が初めて左都御史兼提督に任命され、両広総督府を広西梧州府に設けた。広東・広西両地域を重ねて管理したからである。後に嘉靖年間（1536～1564年）、両広総督は広東肇慶府に置くようになった（『明史』巻73）。清朝も同じ制度を引き続き行い、永久に広東を中心とした（『清史稿』巻197～199）。1917年に陸榮廷が最後の任命となった。

注13、中南半島（China-Indochina Peninsula）は東南アジアに位置する半島で、アジア南部の三大半島のうちの一つである。中国とインド亜大陸の間にあって、西にはベンガル湾、アンダマン海とマラッカ海峡を臨み、東には太平洋の南シナ海がある。また中国の雲南省の南部を含む。もとはフランス語に翻訳される際の造語されたインドシナ（Indochine）として知られている。インドと中国の間の文化の影響を受けるという意味である。現在中国や一部の人は「インドシナ」に含まれる「シナ」は差別的ニュアンスを含むため、中国の南にあるという意味で「中南半島」と呼んでいる。地理学では東南アジアを指し、主にミャンマー・タイ・ラオス・ベトナム・カンボジア・マレーシア・シンガポール等七カ国を含む。面積は約207平方kmで、人口は三億人を超えた。さらに山や河川等は中国とつながり、そのため「山は同じ山脈、水は同じ源」の諺がある。互いに紀元前2世紀からの長い交流史はあるが、民族が多く、言語は非常に複雑であるため、残念ながら歴史的な記録の翻訳や研究等はいまだされていない。

注14、小タイ族（Tai Noi）人はタイ人の一つであり、人種的には古モンゴロイド系インドネシア・マレー人種と南部モンゴロイド（新モンゴロイドの一種）の混合体である。主にメコン川とチャオプラヤ川流域に居住している。古哀牢人ともいう。小タイ族と呼ばれているのは、オーストラロイドの血が少々混じっているとされるクメール人やチャンパ人との混血が進んだ結果であり、北部の大タイ族（シャン族）と比較して、肌の色は浅黒く、また背が低いめと言われている。同時に歴史的な対立や近代以降も行政区画の違い等により、大タイ

族との違いは少なくない。

注15、タイ北部の藍那朝廷は、蘭那泰とも言い、百万稲田の国という意である。王巨新『清代中泰関係』（中華書局、2018年7月）第一章「清代以前中泰関係概況」二〈元代中泰関係〉によると、蘭那王国は中国の元朝時代にタイにある古王国で、女人国、また女王国とも称した。タイ北部中心に1292～1558年に実在した王朝である。現在のチェンマイ周辺にあたる。中国の史書には「八百媳婦蛮」と呼ばれている。『元史』巻17「世祖14」〈至元二十九年（1292年）〉八月条には「（元世祖）以軍征八百媳婦国」の記録がある。

注16、那魯は、ラオスの第三の大都市で、経済の中心地。南部のサワンナケート（Savannakhet）省に位置する。東はベトナムと接し、西はメコン川を隔ててタイとなる。

注17、「那龍」はミャンマーシャン邦の地名だが、中国語における名称で不詳。

注18、壮泰語系は壮侗語派（Zhuang-Kam branch 壮侗語支）の中の漢・チベット語族（Tibeto-Chinese, Sino-Tibetan 漢藏語系）に属する。その中のチワン・タイ語群（壮傣語支）の一つである。チワン語に関しては後ほどに説明する。ここではタイ語について紹介したい。大林太良編民族の世界史シリーズ6『東南アジアの民族と歴史』第I章「東南アジアの自然・人種・言語」3〈東南アジア諸言語の系譜〉によると、タイ語系諸言語には中央部のタイ中部平野やラオス低地部以外にもミャンマーのシャン州、中国雲南省やインドシナ北部等の平地と山間低地部に広く分布しており、チベット・ビルマ系諸言語もまたビルマ以外に雲南省とそれに隣接するインドシナ北部山地にも存在する。タイ諸語の分布はそこからさらに広西、貴州等の南中国に、チベット・ビルマ諸語の分布はアッサム、ヒマラヤ、チベットへと続いており、これらの諸言語がそれぞれ北から南へと張り出してきた様子をよく表している。

注19、黎僂（li Bo）語を話す少数民族を指す。黎（li）は黎人で、僂（poi）は僂人のこと。詳しい解説は注23と30参照。

注20、壮泰人は注18のチワン・タイ語群（壮傣語支）のように、壮（Zhuang）語と泰（Tai）語を話す人々をいう。

注21、普沙、中国語における名称で不詳。

注22、普泰（Pu Tai）はラオスの普泰族の名称である。儂人とも称すが、不詳。

注23、僂（Bo）夷は、『漢語大詞典』によると、古代から揚子江上流地域及び雲貴高原に住む

西南少数民族の名である。また「僂人」ともいう。『呂氏春秋』第20巻「恃君」には「離水之西、僂人野人（中略）多無君」といい、『漢書』巻45「伍被伝」には「南越賓服、羌僂貢獻、東甌入朝」がある。その顔師古注は、「僂、西南夷也。音蒲北反」とする。汪寧生『古代雲貴高原上の越人』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収）によると、「元・明代以後は「百夷」「僂夷」「白夷」「白衣蛮」等の同音字の呼び方が見られる。主に広西左右江地区、雲南省文山地区及びベトナムの紅河地区に分布しており、現在の四川省南部や雲南省東部に居住している傣族の先祖にあたる。顔に入れ墨、歯黒、干欄に住み、死者を高い山に懸け棺をする等の風習がある」とある。

注24、蒲（Pu）人は元代・明代の史籍にある少数民族・布朗（Blang）族・徳昂（トオウン）族に対する通称である。すなわち古代の「百濮（Pu）」を指す。清・顧炎武『天下郡国利病書』「雲貴交趾」篇には「蒲人、即古百濮」とある。『漢語大詞典』によると「濮」（Pu）は中国古族の名で、『尚書』「牧誓」には、周景王二十二年（紀元前523年）「楚爲舟師以伐濮」という記事がある。商周時代の八個の少数民族（庸・蜀・羌・髳・微・盧・彭・濮人）の一つで、漢江の南と楚の西南に分布している。その後滇西南にも濮人の記録も見られるようになった。一説には前期が百越と密切な関係があり、後期の百濮はモン・クメール語を話す族群に変身したという。つまり前期は壮侗語族群に属し、後期元代以後の蒲人に当る。南アジア語族（Austro Asiatic語系）のモン・クメール語派となる。『左伝』「文公十六年の条」には「麋人率百濮聚於選、將伐楚」というのがみられる。1953年以後、統一して「布依族」と称した。本文には「蒲人（Poren）」とするのは、現代中国語の発音であるが、越語では「Pu」と読む。

注25、大伯夷、中国語における名称。不詳であるが、伯は「Po」（僂・百夷）と同音字であるので、注23と同じ古傣族をさす。

注26、土僚は、壮族・水族・仡佬族の旧称。「土人」「布土」とも称した。現在の広西壮族自治区、雲南省に分布している。『漢語大詞典』によると、「僚」は魏晉時代以来四川・陝西・貴州・雲南・広西・湖南・広東省等の地域に居住している原住民族。『集韻』には「僚、西南夷の総称。謂之僚、或從犬從人」とする。「土」は原住民の意である。唐・劉恂撰『嶺表録異』巻下には、「夷人通商於邕州石湫口、至今謂之僚市」とし、また『太平御覧』巻356「兵部」〈兜鍪〉の項目には「郭義恭広志曰、僚在牂柯與古鬱林・交趾・蒼梧。皆以赤漆皮爲兜鍪」と、僚は牂柯や古

鬱林・交趾・蒼梧等に居ると記されている。

注27、『漢語大詞典』によると、仲家（Zhongjia）人は布依（Bouyei）族と雲南省に住む一部の壮（Zhuang）族に対する古い呼び方である。汪寧生『古代雲貴高原上の越人』（同注23）によると、「貴州省や雲南境内に、地方志書の中に「百粵族」に対する分類には、さまざまな「仲家」がある。例えば白仲家・黒仲家・卡尤仲家等があり、皆百越系統に属する。「仲家」すなわち布依族であり、「水家」は水族で、「儂家」は壮族である。今日も同じ言語を話し、壮傣語系に分類する。彼等は雲貴高原に住む古代越人である」という。

注28、僮（Zhuàng）人の僮は宋代から一部地域に撞・獐と表記された。『明史』巻45「地理志六」（福建・広東・広西篇）には「柳州府・洛容。正徳時、爲瑤、僮所據」と、明代の正徳（1506～1521）年間、広西・柳州府は、瑤族と僮族によって占められていたと記す。また清代から「獐人」とも呼ばれ、清・陸次雲撰『峒溪纖志』「獐人」の条には「獐人居五嶺以南」と、五嶺の南に「獐人」が居住しているとの記述がある。いずれも差別用語であるため、中華人民共和国になった後1965年に「壮族」と改めた。

注29、仲人注27と同じもの。

注30、黎（lǐ）人は広東省、主に海南島の海南黎族苗族自治州に住み、その他の数万人は州外の各県に散在する。1977年の全国人口調査によると、約68万人いる。壮侗（チワン・トン）語は壮侗語派（Zhuang-Kam branch 壮侗語支）であり、その中のリー語群（黎語支）に属する。海岸地帯の黎族は漢族と混在して住んでいるため、漢語の出来る者は少ない。清・屈大均撰『広東新語』巻七「黎人」には「黎母山高大而險。中有五指七指之峯。生黎獸居其中、熟黎環之。熟黎能漢語、嘗入州縣貿易」と、険しい山中に生黎が住み、漢語を話せる熟黎がその外側に住み、貿易のために州県部にも来るという。

注31、言語連合（Sprachbund）というのは、言語接触が進んだ結果、ある一定の地域で話されている言語に、系統を超えて同じ特徴が見られることがある。これを言語連合と言う。佐久間淳一等共著『言語学入門』、第二十六講「世界の中の言語」〈言語の接触〉（研究社、2004年12月）による。

注32、スワデシュ（M・Swadesh）は、アメリカの言語学者。統計的手法を使い、二つの言語が一つの言語から分裂した時代を推定する言語年代学を提唱した。しかし後になって様々な

問題点が指摘され、現在ではほとんど話題にのぼらなくなった。伊藤雅光『計量言語学入門』第一章「計量言語学とは何か」1. 3. 3〈言語の系統研究〉(大修館書店、2002年4月)による。

注33、夏鼎(1910年～1985年)は浙江省温州市出身の考古学者・歴史学者。新中国の考古学の基礎を確立した。1930年北京燕京大学に入り、翌年清華大学史学科に転校した。1934年に公費でアメリカの考古学専攻留学試験に合格したが、翌年河南省安陽・殷墟の発掘の作業に参加。その後1935年夏、イギリスで考古学研究の留学生生活をスタートした。ヨーロッパ諸国の考古学を学びながら、エジプトや諸外国の発掘作業に参加した。後にロンドン大学考古学博士課程に入り、エジプトのカイロ博物館に研究者として働き、イラン・インドやミャンマー等各地で発掘の仕事に携さわった。1946年7月にロンドン大学のエジプト考古学哲学専攻の博士号を獲得した。1943年～1949年中央研究院歴史言語研究所の研究員になり、1949年から浙江大学の教授となった。後に中華人民共和国の中国科学院考古研究所の所長にも任命された。1982年中国社会科学院副院長や中国社会科学院考古研究所の名誉所長等の要職にもついた。『中国考古学研究』『中国文明の起源』『炭素-14測定年代和中国史前考古』等日本でも名高い論文がある。

注34、西越は西甌・駱越を指す。今日の壮族を構成する主な族群である。先秦時代から後漢まで、嶺南の広西南部・海南島・ベトナム中部・北部等中心に居住した。秦始皇帝が嶺南を統一した際に、桂林郡に入り、その後一時期漢代の南海郡の南越国にも属したが、紀元前111年漢武帝南越国が滅亡したため、嶺南地域を新たに九つの郡を設置した。『漢書』巻六「武帝紀」には「遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠厓・儋耳郡」と細かく分かれ、明らかに南越国と異なる。漢代以後南越国は消滅していくが、西越はその後も存在した。莊爲璣『建国以来对百越の歴史研究——關於東越與南越和西越の族源問題』(百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収)によると、「百越族が東部起源であるという説は、中国の東南沿海地域に分布する東越(于越・甌越・閩越・揚越等)が、七千年前の河姆渡遺跡であるという説である。福建省の昙石山人や広東省の河宕人等の遺跡から発掘された人骨はインドシナ人に最も近い。長い頭部、低い面角、鼻幅広いタイプ等の特徴を持つ。また人工的に抜歯した痕跡がある。しかし反対には西越民族は遠く海岸から離れ、山地に居住している。その上、いくつかの族に分化した。主に西甌・駱越・越裳・掸国・騰越・滇越・越西・夜郎等がある。史記巻116「西南夷列伝」には詳細に記録している。(中略) 駱越是西越の主流であり、広西の西南、広東

の東西部、ベトナムの北部に分布する。中心は今日の柳州より南の南寧市（左右江の合流点）にあり、ここから西の雲南、北の貴州へ広がった。しかも建国以来の考古学上の発見は、広西壮族自治区・雲南・貴州・及び広東西部全部駱越の石器、銅器を出土した。広西壮族自治区中心とした早期石器は種類が豊富であり、すでに中原地域と往来していたので銅鉞も見つかった。特に西越民族が創作した銅鼓は広東地域において先秦時代以前の遺跡には見当たらない。また西越の双肩石斧等の石器は東越にも無かった。古人類の遺跡も数多く広西壮族自治区で見つかり、36000年前の柳州市来賓県の麒麟山人や12000年～7000年前の甌皮岩洞穴遺跡等は、西越が東越や南越の遺跡より古い実証している。黄佩華『壮族・駱越與西甌』『青銅鑄魂』（南方国土資源網、2018年10月29日）によると、西越文化は西甌・駱越文化ともいい、代表的ものは稻作文化、大石鏟文化、龍母文化、銅鼓文化、花山崖壁画文化等がある。

注35、大石鏟文化は近年、広西・南寧市の周辺で石製のカンナが300個あまり発掘された。およそ4000年以上前の新石器時代晩期のもので、稻作文化との関わりがあるとされた。石鏟は大きさから言っても、農作業に不向きで、古代祭祀の道具であろう。大石鏟は広西壮族自治区・広東・海南島およびベトナム北部地域を中心に発現されたため、この地域は「大石鏟文化圏」と称されている。その上最新の研究結果によると、広西壮族自治区は古くから稲作の資源が豊富な地域であり、未だに野生稲の資源もあるため、中国の稲作文化の起源と分布においても、重要な研究対象地域である。

注36、羅香林（1906年～1978年）は広東出身の歴史学者。民族学や客家学等、中国人種の族譜学の創設者でもある。清華大学史学科で、王国維・陳寅恪等の指導を受けた。主に唐史の中における百越人の源流について専攻した。卒業後、広州の中山大学、暨南大学の教授となり、また香港大学でも教鞭を執った。『古代越族文化考』『客家研究導論』『唐代之光孝寺及桂林磨崖仏像』等日本でも名高い論文がある。

注37、駱越は、西甌と共に先秦時代広西地域で暮らしていた先住民である。『呂氏春秋』第14巻「孝行覽・本味」には「越駱之菌」の一文があり、その高誘注は「越駱、国名」とする。また『史記』巻113「南越尉佗列伝」には「佗因此以兵威辺、財物略。遣閩越・西甌・駱役属焉」とあり、史記索隠注は「交趾・九真二郡即甌駱也」とする。南北朝・裴駰の集解の古注は、「駱」に対して「漢書音義曰、駱、越也」と注釈している。その後、唐・司馬貞の索隠注にも「駱田」

とあり、姚氏案広州記云の「交趾有駱田、仰潮水上下。人食其田、名爲駱侯。諸県自名爲駱将、銅印青綬」を引用している。また『後漢書』巻54「馬援伝」には「馬於交趾得駱越銅鼓」の記録があり、その唐・李賢注には「裴氏広州記曰、俚獠鑄銅爲鼓」と解釈する。また『旧唐書』巻41「地理志四」〈嶺南道〉「邕州」の条には「驩水俗称鬱林江、即駱越水也。亦名温水、古駱越地也」と記されている。今日の駱越人は主に左右江流域、貴州省の西南部、ベトナムの紅河デルタ地域に暮らしている。広西壮族自治区博物館出版の『從五国到方国——壮族文明起源的新探討』(2018年)によると駱越は、壮族・侗族・黎族・布依族・傣族・水族、仫佬族、毛南族、及びラオスの老龍(ラオロン)族、ベトナムの京(キン)族を包括している民族の祖先であると発表された。

注38、北江(Bei River)は中国南部に流れる大河。珠江の支流の一つであり、西江に次ぎ大きな支流である。本流の流れは長さ468km、流域面積は珠江水系の10.1%を占める。江西省贛州市の南嶺山脈に発する。南に広東省に入り、仏山市で西江へ合流し、ここから北江という名前となる。

注39、大渡河は四川省西部に流れる河の名。揚子江水系岷江の最大支流である。青海省バインハル山脈南面からの河川が四川省北西部に入り、東に流れ、ついに南流して大雪山・邛崃山の両峽谷間を流れ、最後は岷江に流れ入る。中流部分は大渡河と呼び、全長は1070kmある。

注40、花山文化は花山壁画を中心とする。その壁画は広西壮族自治区南部に位置する崇左寧明県、左江流域の支流寧明江のほとりにある壁画。戦国・秦時代以前から漢代にかけて、西甌・駱越先住民達の絵画芸術の集大成である。赤い鉱物の顔料を用いた壁画は、長さ172メートル、高さ90あまりの崖壁に残されている。現存図像は1900箇所あり、主に人物・動物・器物の三種類がある。祭事の儀式を表す場面もある。この川沿いの山間にある巨大な壁画は、その規模、勢い、広大さから中国最大級のものとされている。内容の豊富さや保存の良さ、また造形の素朴さと風格のおおらかさで、2016年7月15日世界文化遺産に登録された。

注41、寧明江は広西壮族自治区南西部に位置する崇左市に位置し、ベトナムに接する。ベトナム境内から崇左寧明県に流れる大河左江の支流である。左江は南寧で右江と合流して鬱江となり、西江に合流して、珠江デルタで南シナ海に出る。数千年前から壮族の祖先にあたる駱越や西甌人はこの地区で居住していた。

注42、壮傣語は壮族語と雲南省に住む傣族語を指す。岩佐昌暉氏によると「傣族の祖先は元々紀元前華南地域に広く分布していたのであり、その言語は漢族と同源の語が非常に多い。古漢語との交渉は極めて古い」とし、その上「タイ語は仏教を通じて、パーリ語やサンスクリット語からかなり多くの語彙を吸収しており、それがこの言語の一つの特徴ともなっている」と指摘している。

注43、百越は「百粵」とも書く。小川環樹等編角川『新字源』によると、「周代までに、今の浙江省南部から福建・広東・広西壮族自治区の各地域にいた様々の先住民の総称」とある。現在「百越」という国は存在しないが、その子孫（様々な越人）は主に中国西南部の各少数民族として、上記の各省・自治区に、また南太平洋諸島、フィリピン南部・インドネシアやマレーシアの南部・東南アジアのメコン川流域・台湾・琉球諸島・朝鮮半島等の地域に暮らしていると考えられている（『東南アジア古代史地論叢』所収邱新民「馬來族源流探討導言」）。史料に見られる最初の百越に関する記録は、秦・呂不韋撰『呂氏春秋』『恃君覽』にある。「楊漢の南、百越の際。（中略）多く君無し。（漢・高誘注「楊州、漢水の南、越は百種有り。皆南越の夷なり、君無しなり）」と楊州、漢水の南に、百種の越民がいるという。漢・司馬遷撰『史記』巻41「越王勾踐世家」には「越王勾踐其の先禹の苗裔なり、夏后帝の少康の庶子なり。会稽に封じて、以て禹の祀を奉守す。斷髮文身し、草萊を披ひて邑とす」と、越という国の由来を記している。さらに唐・顔師古の注には「交趾より会稽に至り、七八千里、百粵雜処す」と解釈している。

注44、西甌は、先秦時代広西北部地域に暮らしていた部族。そこは主に今日の柳江より東、鬱江より北、湘江・離江より南、西江より西の広い地域をいう。壮侗語族の先住民とされる。『史記』巻113「南越尉佗列伝」には「佗因此以兵威辺、財物賂。遣閩越・西甌・駱役属焉」とあり、史記索隠注は「交趾・九真二郡即甌駱也」とする。秦と西甌の戦いは「秦甌戦争」とも呼ぶ。『淮南子』巻18「人間訓」によると、「三年不解甲弛弩、使監祿無以轉餉。又以卒鑿渠而通糧道、以與越人戦、殺西甌君譯吁宋」と、始皇帝の軍隊も3年間をかけた手強い軍事力を持つ西甌人であった。西甌はまた西甌とも書き、通音字である。また『旧唐書』巻41「地理志四」（嶺南道）には「鬱平（今日の広西壮族自治区玉林市あたり）漢広鬱県地、属鬱林郡。古西甌・駱越所居」と記されている。

注45、東越は注34の西越と共に百越の先祖に充り、東海沿岸に住む越族で、西越と対応する呼

びかたである。古代の東甌に充る。東越は于越・甌越・閩越・揚越等がある。『史記』巻114「東越列伝」によると、先秦時代から漢まで（紀元前334年～同220年）に、今の浙江省東南部・福建省北部中心に居住していたが、漢武帝元鼎6年（紀元前111年）東越王餘善が叛乱を起し、その部族に殺された後、一族は江淮地区に移住し、「東越地遂虚」と、漢代以後次第に消滅した。蒋炳钊『東越歴史初探』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収）によると、「閩越国は、漢武帝元封元年に滅亡された後、東越、閩越はすでに歴史上の過去となった。元の住民達は三つの方法で生き延びた。一つは統制者による強勢な移民政策、一つは大量な逃亡説。最後はそのまま現地に残った」と指摘する。

注46、嶺南文化とは、「嶺南」は五嶺より南の地域をいう。古くはベトナムの北部をも含めた。

五嶺は湖南省衡山から東海に至るまでの山系であり、秦始皇帝のときから西甌・駱越の地域に入る唯一の通路でもある。古来五嶺山脈は地理的に天然の擁壁となっているため、北と南の往来の妨げとなる。「南嶺」とも呼んだ。また五嶺より南の地域は「嶺南」と呼ぶ。

注47、柳江人とは、1958年中国南部広西壮族自治区柳江県の洞窟で発見された新人の化石の名前。成年男性の頭蓋骨の他に、椎骨、肋骨、大腿骨が出土している。文化遺物は発見されなかった。東アジアで見つかった最古の化石人類のひとつである。周口店の山頂洞人に比べると身長が低く、顔面骨格が広型であり、正確の年代はまだ分からないが、日本の港川人や縄文人に比較的に近い形態を持っている。

注48、桂林甌皮岩人類洞穴遺跡は、桂林市南部に位置する象山区の独山西南麓にある。約12000～7000年前の遺跡である。1965年に発見され、1973年と2001年に二度にわたって発掘調査が行なわれた。数千万件の石器・骨器・蚌器・角器・牙器等が発見され、中国最古の陶器と新石器時代の洞窟遺跡の中に、最古の石器加工場もあった。32個の墳墓も発見され、そのうちの多くは屈肢蹲葬の人体が埋葬されていた。「華南及び東南アジア有史以前の考古史上、最も重要な指標と資料庫倉」とされている。

注49、ネグロイド人種（Equatorial race）とは、身体的特徴に基づく歴史的人種分類概念のひとつである。日本では一般に黒人人種・黒人と同義に理解される。解剖学的な特徴は、頭部が長くで、グラベラ（眉間）が発達し、オトガイ（顎）は後退気味である。頭部全体が小さめである。手足が長い、特に膝から下が長く。手首、足首は細い。骨密度が高く、骨粗鬆症

になりにくいとされる。

注50、広西・来賓市麒麟山の洞窟で発見されたため、麒麟山人と名付けられた。1956年1月14日、中国科学院古脊椎動物研究チームにより、来賓市興賓区で頭穴、上顎骨と口蓋骨の大部分を含む頭蓋基部の人骨が発見された。36000年前、旧石器時代後期の古代人類、壮族の先祖として識別される。

注51、鯉魚嘴人は1980年1月広西壮族自治区柳州市龍潭公園内の鯉魚嘴山のふもと新石器時代の貝塚から発見された。2006年全国の古代文化遺産保護遺跡として指定される。今から12000年～7000年前の貝塚で、新石器時代の早期～晩期までの二つの堆積層があった。その中に頭蓋骨の化石も含まれている。(何乃漢等『柳州市大龍潭鯉魚嘴新石器時代貝丘遺跡』による。『考古』1983年9月号所収)

注52、「干欄」は高床構造の建物で高床式住居のこと。今から6000～7000年前とされる浙江省の河姆渡遺跡から各種の柄（ほぞ）、柄穴を加工した木造部材が出土した。これらを始めとして、同種の遺跡は新石器時代から歴史時代まで、干欄文化は浙江、江蘇、湖北、雲南省などでも発見されている。現在にも中国の西南少数民族地域を中心に、東南アジア、マダガスカル、台湾等の地域でよく見かけられる。日本の神社や穀物の倉等もその作りが多い。主な特徴は竹や木造で上下二段式に建てられ、上は人間が住み、農作物の倉庫とし、下は家畜の小屋となる。階段で上り下りする。亜熱帯地域に特有な湿気、暑さやまた爬虫類・獣の加害をも防ぐ事ができる。『魏書』巻100「僚伝」には「僚者蓋南蛮之別種。自漢中達於邛笮川洞之間、所在皆有種類甚多。散居山谷（中略）依樹積木以居、其上名曰干蘭。干蘭大小随其家口之数」とある。

注53、屈葬とは、地面にあまり大きくない穴を掘り、その中に手や足を折り曲げた姿勢で死者を葬る。壮（チワン）族の古くからの葬式方法である。(大林太良編『東南アジアの民族と歴史』「採集狩猟生活の時代」による)

注54、抜歯とは、「鑿齒」のこと。古代における一種の民族風習である。晋・張華撰『博物誌』には「僚子（中略）即長、皆拔去上齒牙各一、以爲華飾」と説明している。また唐・張説『広州都督嶺南按察五府経略使宋公遺愛碑頌』には「雖有文身、鑿齒、被髮、（中略）種落異俗字化齊」とある。さらに宋・樂史撰『太平寰宇記』巻167「嶺南道十一」〈欽州〉条には「欽州

風俗(中略)又有僚子、椎髻鑿齒、赤禪短褐。專欲喫人、得一人頭、即得多婦」と、僚の首狩り族のことを記録している。

注55、言語関係語族樹形図は、言語の親縁関係を表す因襲的な語族樹形図(系統樹とも言う)。

ジョン・ライアンズ著、近藤達夫訳『言語と言語学』第Ⅵ章「言語変化」の第二節〈いろいろな語族〉(岩波書店、1987年6月)による。

注56、事例に関しては、詳細に潘其旭の『壮族詞序順行結構A+B型的思維模式與漢語詞序順行結構B+A型的思維模式的比較研究』(壮学首届国際学術研討会論文 1999年4月)参照。

注57、『墨子』第六卷「節用・中」「古者堯治天下、南撫交趾」。(明治書院、新釈漢文大系、山田琢著。1987年8月)

注58、『大戴礼記』「少間」第76卷「虞舜以天德嗣堯布功、散德制礼」。(中略)南撫交趾、日月出入(明治書院、新釈漢文大系、栗原圭介著。1991年7月)

注59、『尚書』上「堯典」第二節「申命羲叔宅南交」(明治書院、新釈漢文大系、加藤常賢著。1987年9月)

注60、交趾(こうし)は漢武帝時代の郡名で、後の交州である。五嶺より南の地域(今の広東省、広西壮族自治区とベトナム北部・中部地域)に充る。詳細は『漢書』巻六「武帝紀」には「遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠厓・儋耳郡」と記している。宋代以後、独立したベトナムに対しても、その国も「交趾」とも呼んだ。(『漢語大詞典』)

注61、南交、古地名。交趾を指す。五嶺以南の地域をいう。南に位置するため名付けた。出典は注59が初見である。清・屈大均撰『広東新語』巻二「地語・南交」には「南交者、粵也。陶唐之南裔也。(中略)而堯名爲南交、故論地名以南交爲古」と説明している。

注62、『史記』巻一「五帝本紀第一」(虞舜者条)「(舜)踐帝位三十九年、南巡狩。崩於蒼梧之野、葬於江南九疑、是爲零陵」(明治書院、新釈漢文大系、吉田賢抗著。一九八七年九月)。その六朝・裴駰集解には「傳曰:舜葬蒼梧、象爲之耕。礼記曰:舜葬蒼梧、二妃不從」と、蒼梧に埋葬したと注釈している。ここの「九疑山」「零陵」は、『中国歴史地図集』「秦・西漢・東漢時期」分冊によると、すべて五嶺より南に位置する地名である。現在の湖南省の湘江と桂林の漓江の合流点辺り。

注63、正しくは『礼記』「檀弓上」第三にある。本文の「檀弓下」ではなかった。「舜葬於蒼梧之野」

(明治書院、新釈漢文大系、竹内照夫著。1987年7月)

注64、『淮南子』第18巻「人間訓」の本文「一軍守九疑之塞」に対する漢・高誘の注「九疑山名也。

在蒼梧、虞舜所葬也」である。(明治書院、新釈漢文大系、楠山春樹著。1988年6月)

注65、零陵、古地名。現在の湖南省寧遠県の南東辺り。伝説では、神話時代の舜帝の墓はこの地にあるという。注63.64参照。しかし『漢書』巻28「地理志第八上〈零陵郡〉」の条には「零陵郡(中略)県十。零陵・營道・始安郡……」の顔師古注には「零陵、武帝元鼎6年(紀元前111年)置」とするが、その続きは「陽海山湘水(今の湖南省)所出(中略)有離水(今の桂林に流れる河の名)東南至。広信入鬱州」と、湖南省の南部と西壮族自治区の北部の間にあると解釈した。

注66、蒼梧、かつて存在した郡名。現在の湖南省南部から広西壮族自治区西北部にかけての地域にあった。秦が中国を統一した後に蒼梧郡が置かれた。郡治は不明である。秦が滅亡すると、南越国に継承された。紀元前111年(元鼎6年)、漢が南越国を滅ぼすと、蒼梧郡が置かれた。郡治広信県に置かれ、交阯刺史部に属した。『漢書』巻29「地理志第八下〈粵地〉」には「今之蒼梧・鬱林・合浦・交阯・九真・南海・日南皆粵分也。(中略)文身断髪、以避蛟龍之害」とする。また『旧唐書』巻41「地理志四」〈嶺南道〉には「漢蒼梧郡、治広信県、即今治。隋立蒼梧於此置郡。(中略)隋旧属廉州、今来属孟陵。漢孟陵県属蒼梧郡」と記す。しかしもう一説は山の名、九疑山とも言い、湖南省寧遠県の南東辺りであるという。注64参照。

注67、『逸周書』、もとの名は『周書』。旧説では孔子が『尚書』を編輯する際に、省略された部分をまとめて、周書の逸文として広めた。しかし戦国時代に偽作されたとの説がある。巻七「王会解」には「伊殷受命、於是爲四方令曰「臣請正東、(中略)十蛮、越漚(甌)、剪髪文身。(中略)正南瓠、鄧、桂国、損子、産里、百濮、九菌。猷珠璣、玳、瑁、象牙、文犀、翠羽、菌鶴、短犬」が見える。

注68、桂国、国名。『漢語大詞典』によると、「桂、唐州名。即今広西壮族自治区桂林」と記されている。用例はない。『逸周書』巻七「王会解」のみ。

注69、『逸周書』巻七「王会解」には「路(駱)人大竹、(中略)倉吾(蒼梧)翡翠(カワセミ)」と、駱人の大きな毛竹、蒼梧のカワセミを取るという句がある。

注70、『呂氏春秋』第14巻「孝行覽」「越駱之菌(きのこ)」の句に対して、高誘注は「越駱国名」

とした。

注71、古無輕唇音は音韻学の概念であり、清・錢大昕（1728～1804年）によって提案された中国初の子音進化法である。36文字の「非敷奉微（36字母・伝統的な韻図などで声母（音節頭子音）を表わすために使われた36個の漢字）」の音のグループが古代には存在しなかったことを指摘した。この音のグループは、古代には「幫滂並明（バンベンミンミン）」と発音され、唐後期と宋時代初期の「幫滂並明（バンバンミンミン）」とは区別されていた。中国語の上古音の音韻体系は、中古音の輕唇音（唇齒音）が存在せず重唇音（両唇音）で発音されていたという説。

注72、壮語の発音記号・ローマ字形式の表記は、1955年に作られ、1957年から正式に使用されるようになった。現在も通用している。岩佐昌璋『中国の少数民族と言語』（光生館）第Ⅱ章「少数民族諸言語の分布とその言語的特徴」1.3〈チワン・トン語派、1.3.1チワン・タイ語群（壮傣語支）〉による。

注73、粵は越と同じ、広東と広西壮族自治区を指す。粵語はシナ・チベット語族、シナ語派の言語のひとつである。広東語ともいう。現在広東省中部および西南部・広西壮族自治区東南部・香港・マカオ・シンガポール等と海外のチャイナタウン・華人華僑社会等およそ8000万人は粵語を使っている。

注74、西南官話（Southwestern Mandarin）とは、主に揚子江上流地域を中心として使われるので、上江官話とも言う。別名は湖広話とも言う。現代中国語の官話に属する。主に四川、重慶、貴州、雲南、湖北、広西、湖南、陝西、江西、チベット、甘肅、広東、海南、福建、東南アジア北部等の地域で使用されている。最も広く使われているのは四川、重慶、貴州、雲南、湖北、広西、湖南七省と直轄市の重慶である。西南官話は明代から北方からの移民が西南地域に大量に入ったため、もたらされたものである。使用人口は2.7億人で、官話の中で一番使用範囲が広く、使用人口がもっとも多い。

注75、土俗文字は、唐・宋時代の壮族の知識人達が、漢字の形、音、意味と六書構字法を利用して、正方形の壮文字を作ったもので、いわゆるsawleu: ɲɔ̌（壮族の文字）と呼ばれていた「方塊壮字」のことである（注5を参照）。主に歌垣の際の歌詞を記録することが多い。清の屈大均撰『広東新語』巻八「劉三姐」の条には、「およそ歌を作る人は、庶民はもちろんのこと、瑤（ヤオ）族、壮（チワン）族、山で仕事をする人なども、歌を作るならば必ず祭壇に捧げ

て祀る。そしてそれを大切に保管する。歌を求めるものに対しては、それを写させる。しかし持ち出すことを認めない。そのためしだいに増えていき、数箱になった」と記す。現在右江の山の谷間に住む壮族には、かつて伝統的な「嘹歌」が流行したが、それは一万六千行ほどのものもあり、土俗文字で記され、今日まで流伝している。

注76、道公字。壮族民間のシャーマンが使う文字のこと。広西壮族自治区では壮族民間のシャーマン、師公教の男巫のことを道公と呼ぶ。師公教は道教が壮族地区に入ってから、壮族特有の信仰と融合し、新たな宗教として生まれたもの。師公教は半農業・半宗教的な存在で、禁妻帯や禁酒などの厳しい戒律はない。道公の主な仕事は、法事や様々な祭事等の際の「跳神」（神降ろしの託宣）といった祭事主導である。なお明清以来、各地にある師公館では、師公の経文の唱本は全て土俗文字で記録されている。また、壮族の麽教経典『布洛陀』もこの土俗文字で記録されている。

注77、『桂海虞衡志』（けいかいぐこうし）は、宋の范成大（1126年～1193年）のまとめたものである。范成大は平江人（現在の江蘇省蘇州）。嚴沛『桂海虞衡志校注』（広西出版社、1986年3月）によると、范成大は乾道8年（1172年）冬、静江府（治所今日の桂林）の広西経略安撫使と任命された。二年の間、広西の山川・景色・風土人情等到大変関心があり、広南西路（今の広西壮族自治区の全部と広東省の一部）を記している。『桂海虞衡志』は十三篇で、淳熙2年（1175年）桂より蜀に入る途中に完成したものである。

注78、庄綽撰『鷄肋篇』（けいろくへん）は、三巻。宋の庄綽の撰である。北宋の史実や見聞を記している。北宋末から南宋の紹興（1131～1162年）の地方官をした。

注79、宋・周去非撰『嶺外代答』は、温州永嘉人。南宋隆興元年（1163年）の進士である。乾道7年（1172）3月に桂林に赴任した。周去非は広西に約六年間滞在し、欽州で教官となり、静江府の県尉となった。范成大と詩の仲間でもあった。『嶺外代答』は彼の唯一の著作で、内容が豊富で、広西に関する全面かつ早期的な重要な文献となった。范成大的『桂海虞衡志』三巻より七巻も多く、辺帥・法制・財計・貿易等各方面の紹介が細かく記録され、宋代における中国と西方各国との海上交通と十二世紀の南アジア、西アジア、東アフリカ、北アフリカ等古国史に関する貴重な資料でもあった。また広西省の他に広東省や海南省各地の記録もあった。生物学・民俗学・民族史・手工業史等の分野においても研究価値が高い。（中外交通

史籍叢刊所収、楊武泉『嶺外代答校注』の前書きによる。中華書局、1999年9月)

注80、范成大撰『桂海虞衡志』「雜志」〈俗字〉の中に、広西は「辺遠俗陋、牒訴券約、專用土俗書、桂林諸邑皆然」と記され、当時の広西の壮族民間に使われていた六つの俗字を紹介している。

他には周去非撰『嶺外代答』には十三文字を紹介し、庄綽撰『鷄肋篇』には三文字を記した。

注81、師公経の詩唱本とは、師公教の經典を唱える時に使われている唱本のこと。師公（道公）は、壮族の師公教の男巫のこと。壮語で「篩 [θail]」と言い、意味は聡明、先覚である。師公教は広西壮族自治区の西部に古くからある独自の民族宗教・麼教のことで、麼教または魔教ともいう。經典の「布洛陀経詩」は、最初口伝によるものだったが、明清以後壮族の俗字・方块字での記録が始まり、唱本が数多く出され広く民間に流布した。現在は『壮族麼経布洛陀影印訳注』が有名である。この宗教は比較的整った経文、唱本、そして教義があり、師館を設けて弟子にそれらを伝授する。入教者は必ず師を拝み、入門の礼を行って受戒する。勉強として経文（唱本）を暗唱、舞の技法を練習し、呪術、雑伎などの専門技術などを覚える。見習いを経て、三年でようやく独立できる。入教者はすべて「師公」と呼ばれる。およそ半分農業、半分師公という兼業形態である。また師公には、二つの教派がある。茅山派の経文は漢文であり、法事をする時は経文の暗誦が中心となる。「文師」と称す。梅山派の経文は、その多くが古い土俗文字の唱本であり、壮語で唱える。法事は武術の演舞が主であり、「武師」と称する。師公の役割（宗教的機能）は、主に庶民のために災いを祓う札を書いたり、邪気を祓い、祭壇を設けて祈願することである。また亡霊を救うなどの法事を行う。師公は、定型の法事の形式を持ち、決まった舞を舞う。神霊の仮面をかぶって唱える師公の唱本の内容は豊富で、先祖の良い行いを宣伝したり、民族の歴史、生産知識、倫理道德、生活風習、神話伝説、民間故事などがある。その儀式は、歌・舞・技で三位一体となるが、これは壮族と漢族文化の融合の産物である。また、近代に入ると、師公の宗教歌舞を更に発展させた「師公劇」が成立し、地方の特色ある師公文化体系が出来上がる。師公が崇拜する神はたくさんあり、一般的には36神、72の相（顔）と言われている。現在庶民に親しまれる師公劇は、師公教の法事・雨乞い等の祭事で、師公が各種の儺面（36種の神様・72種の儺面・合わせて108種の役あり）を被り、おのおのの音楽に合わせて、経文を唱えながら踊る劇である。主に広西壮族自治区の貴県、樟木と龍山等の壮族居住地に現存する。

注82、師公教は広西壮族自治区の西部に古くからある民族宗教・麼教のこと。麼教または魔教ともいい、現地語では師公教と呼ぶ。經典には「布洛陀經詩」がある。麼教經典には「麼經布洛陀詩」があり、これは壮族の聖書のようなもので、また壮族の古神話集でもある。詳細は注81参照。

注83、氐羌 (Diqiang) とは、中国古代少数民族氐族と羌族を合わせた呼称である。居住地は今日の西北地域にある。『詩経』「商頌」〈殷武〉には「自彼氐羌、莫敢不来享、莫敢不来王」とする。

注84、華夏は元々中原地区をさす。後には全国のすべての国土をいう。夏は大の意味がある。出典は『尚書』卷11「周書」〈武成〉「華夏蕃貊、罔不率俾」である。(明治書院、新釈漢文大系、加藤常賢著。1987年9月)

【引用文献】

『尚書』『礼記』（『十三經注疏』〈全二冊〉清・阮元校刻所収。中華書局出版、1980年9月）

『淮南子』（『淮南鴻烈集解』〈全二冊〉劉文典撰、馮逸・喬華点校所収。中華書局出版、1989年5月）

『墨子』『呂氏春秋』等（『二十二子』所収。上海古籍出版社、1986年3月）

『史記』『漢書』『後漢書』『魏書』『隋書』『旧唐書』『元史』等（『二十五史』所収。上海古籍出版社、1986年12月）

『大戴礼記』（明・程榮纂輯『漢魏叢書』所収。吉林大学出版社、1992年12月）

『桂海虞衡志』（宋・范成大撰。山川風情叢書『南方草木狀』外十二種所収。上海古籍出版社、1993年12月）

『嶺表録異』（唐・劉恂撰。山川風情叢書『南方草木狀』外十二種所収。上海古籍出版社、1993年12月）

『嶺外代答校注』（宋・周去非撰、楊武泉校注。中外交通史籍叢刊所収、中華書局出版、1999年9月）

『太平御覽』宋・蜀刊影印本（台湾商務印書館出版、1984年8月）

『広東新語』（清・屈大均撰〈1630年～1696年〉香港中華書局、1974年2月）

【参考文献】

- 岩佐昌璋『中国の少数民族と言語』（藤堂明保・香坂順一監修『中国語研究学習双書』5所収。光生館、1983年7月）
- 王巨新『清代中泰関係』（中華書局、2018年7月）
- 大林太良編民族の世界史シリーズ6『東南アジアの民族と歴史』（山川出版社、1990年10月）
- 汪寧生『古代雲貴高原上の越人』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収、中国社会科学出版、1982年2月）
- 莊爲璣『建国以来对百越の歴史研究——關於東越與南越和西越の族源問題』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収、中国社会科学出版、1982年2月）
- 邱新民『東南アジア古代史地論叢』（新加坡・南洋学会出版、1969年3月）
- 蔣炳釗『東越歴史初探』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収。中国社会科学出版、1982年2月）
- 劉錫蕃『嶺表紀蛮』（アジア民族考古叢刊第五輯、南天書局、1987年1月）
- 中国社会科学院主催、譚其驤主編『中国歴史地図集』「秦・西漢・東漢時期」分冊（中国地図出版社、1982年10月）